近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

（1）　このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。

（2）　このデジタルアーカイブの利用に際しては「東京大学経済学図書館電子資料利用規則」に同意したものとみなされます。

（3）　印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。

（4）　画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。

（5）　画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものとして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。

（6）　文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。

（7）　本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。

（8）　本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。

明治見聞錄

四

東京大學經濟學部研究室
80
266

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5505535202

朱書

東京府立図書館

38448

東京大学 経済学部 研究室
80
266

明治三庚午八月 雜稅

稅法之定

	坪数	上町	中町	下町	御殿 土地 社寺
柿二階	二分六リ二毛	二分一リ九毛	一分八リ七毛	一分三リ八毛	一分三リ八毛
瓦二階	二分二リ一毛	一分八リ七毛	二分九リ九毛	一分一リ七毛	一分
瓦平家	一分九リ五毛	一分三リ四毛	一分一リ毛	八リ二毛	七リ
柿平家	一分八リ二毛	一分三リ毛	一分九リ七毛	九リ七毛	八リ三毛
柿二階物置	一分八リ二毛	一分三リ毛	一分一リ毛	八リ二毛	七リ

家作一坪ノ積リ

○三階ハ二階ニ七分ノ一ヲ加フ

○貴門鎖寺鳥屋雪隱物置ニ準ス但居宅作リ付ハ分ハ居宅ニ準ス

○寺ノ湯搭屋ハ物置ニ准ス

○廐掛鐘堂穴納屋ニ準ス

○社及神宅堂宇ハ新而物置ニ準ス

○土藏者無稅

○消防道具小屋ハ無稅

○冠木門ヨリ潜門或者塀等都而無稅

○藪燒ハ其ヨリ十三ヶ月休稅

○居宅藪燒ハ其年ヨリ仮普請ヒ四ヶ月休稅

○銅瓦石瓦ハ瓦ニ準ス

○草葺及木皮葺ハ柿ニ準ス

東京府

坪数 何程

吠銀 何程

月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月

朱書

毛二階物置 柿二階納屋	一分 三リ二毛	一分 一リ一毛	九リ壹毛	七リ	五リ九毛	月 日
毛平物置 柿平物置 毛二階納屋	一分 八毛	九リ一毛	七リ八毛	五リ七毛	四リ九毛	月 日
毛平物置 柿平物置 金三階納ヤ	九リ三毛	七リ八毛	六リ六毛	四リ九毛	四リ二毛	月 日
毛平納ヤ 柿平納ヤ 住居三階蔵	七リ六毛	六リ壹毛	五リ壹毛	四リ	三リ四毛	月 日
住居土蔵	五リ七毛	四リ八毛	四リ一毛	三リ	二リ六毛	月 日

納税之期限　市中毎月二日ヨリ十日迄　社寺同土日ヨリ木日迄　寺廟士九月九日ヨリ九八日迄

左之割ヲ以テ各其管轄所ニ納返可申候事

惣ノ高　銀何程

居所　地名　姓名　何某

一堺縣知事小川弦太郎　免職謹慎之由衆ハ縣札を造製し管下を通用セリ　又宗札ヲ殺山迫の廣金ニ引替セるより　其砂金起る趣也

左之新聞ヲ得タリ因テ考ヘ知ル可し　我七月十九日イトト云州ニて大戦爭アリ　佛大敗ス　佛帝ナポレオン　蕃兵ノ為ニ生擒セラレタリ　因テ其翌日ヨリ佛國共和政治ノ國ト変シタリ　右ハ佛ノ艤脚船ニ乗テ報知ノ由　蕃國ツイスコンシュル　ヨクアベッキノ聞ル話ノ佛聞シタルナリ

昨十二日南校ヨリ呼達之振確説ナラン

八月十三日

風聞ニ蕃魯西亞七ヶ崎ニ以佛部西軍中ニ乱入ナポレオンを生擒セシ由

一蕃魯士ト佛部西ノ戦爭ニ付テ一説アリ　佛ノ海軍蕃ノ軍艦ヲ砕ノ然ルに蕃人コレニ依テ陸軍隊ノ以て佛ノ都府ヘト進撃シ終ニ巴里斯ノ二十四里距離マデ入ト云

一小米堅ヘ若松村ト云村出来たる由

規則

一府藩縣支配地内山林野沢及海岸附浮洲等ハ悉皆黄ヒ

刺墾ハ一反限額ニ若ハ村内ハ勿論近傍村々故障有無ニ出ル此度
相改無之ニ付ハ反別ハ一歩ニ限長崎奉行ニ於テ名詐欺下手ニ地代
永年ニ至リ不分ニ成事
但其少ク行ル故障之所有ハ利害得失ヲ弁明シ民政者ニ出
可者之変ヲ可更事
一試作地ハ種類反別ニ多少ニ拘ハラス故障無之者ハ長崎奉行
但林陣屋五地ハ代官地ハ属考場ハ試作ヲ以テ修園相
済民政者ニ伺之上可取計事
一一歩以上之刺墾ハ畑地之種類ニ拘ハラス由来ヲ記載シテ且絵面ヲ副
修民政者ニ伺ヒ可申事
一府藩縣ハ今之地或ハ地之貢輸関係シテ用水ヲ分流長内ハ雖モ
田畑ヲ浚シテ溝渠ヲ疏又ハ従来ノ旅水溜池等ヲ堤防ヲ敗チ
或ハ中間ヲ渉シテ水利ニ関係シテ地ヲ刺墾願者ハ地之廣狭ニ
拘ハラス他之換米之有無ニ依調修絵面ヲ所民政者ニ伺ヒ図之紀事
但面百町以上之地ハ長崎輸入り文場ヲ検者ハ民政者
役負ヲ以テ主命可更事
一高入畑貢ハ反別之多少ニ拘ハラス地之品位ヲ検査シテ至当之免
附取調民政者ニ伺出事
一官負ニ於テ刺墾シテ者ハ一歩以上ヲ雖モ故障之有無利害得
失ハ不及ト経費之救ヲ願筆ニ地之不敷反別等明細書記
修図ヲ所民政者ニ伺出許可之功ヲ可記事
一管庫ニ於テ名詐刺墾地ハ絵面ヲ詳明ニ且又伺之上免許
之分ハ反別ヲ已ニ出ル毎年十二月限民政者ヘ之届出事
右之通確守可成事
右之通ヲ以テ浮ヲ達ス事
庚午十月

京都府

長崎城下白壁町高札之写
徒党ハ天下之厳禁ニ付右背ク者命柄ヲ法之正業成者ハ非常之
沙汰ヲ以可有之事

庚午十月

別紙申渡書之趣堅相守可申旨近年公作事後之者共所業嘆敷之事不可申旨殊ニ昨年書春ニ至り厳敷取調申渡知事公申迎ひ喰後飯米貸元ニ無名之者共

朝廷申仁恤之旨を振申渡奉称之者共多ク打捨ニ成ル十分暴風雨ニ付家屋潰ル申雖深之御恤ニ可申ク預之ニ付ル一應ク所出ニ及ハス常有ク暴業及騒擾ニ至ル邸内ニ近乱入之者ニ不得ク不得ク辰不悔

朝憲ニ至ル付ク正五位山河三郎ニ成ル為ク

正文部化村氏一同共ニ為ク浮今後後業不法之者共法ニ為ク

無之人浮遊之者ハ申渡書之趣ニ相違ク可申ク事

庚午十月

大属氏政掛

農民騒擾ニ付ク近在百姓後業風聞ニ付ク

百姓中之者ニ音暴風雨ハ沼長美山或ハ久支峠ニ悪業ニ及ル次第者不

悪ニ為ク在ク人之者ニ成ル是ハ騒後業ニ付騒ク之ク

但山方之百姓重立ル知ル村方ニ姫ヶ之事集ル

九月廿六日夜大森川原ニ百姓多人数屯集之上騒ク押掛ル出

張ク被諭ル仕度ク旨ニ付ク行ク米麦之義ニ付ク騒ク

寺脱乱入米麦居宅内所ニ有之ク

大砲空砲ニ付ク

百姓帰ル

大人ク

米麦居宅ハ所方人宅ニ

野ヶ子ニ為ク

小ク所ニ米麦四軒ク

大百姓多人数ニ

騒ク

一百姓騒出ル

騒ク押ク

道筋酒屋或ハ家屋ニ

禁出ル

一廿一日諸騒ク一切鎮ル

一廿七日夜米麦居宅所方人宅ニ

役方法

輝人宅ニ

騒ク

一知事公東京ニ

帰ル

太政官ニ

一百姓

一九月九日

一米麦ク者苗子ニ

貸ク

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5505535202

但沽券ハ七ト云ハ此節入宰ス成ル事

一坪下米帳合ニ掛リ居ル分ハ筋ヲ以テ捕ス成ル事

一近在ニ而姓名不詳者ハ迎ヒ人ヲ以テ出ス成ル事

長淡路守殿米穀ヲ家ヲ以テ悪人ヲ捕ス先合ヒ之事ヲ

右去十月三日表振ヲ掃除之写ス也

管内村々数ヶ所寺院ヲ以テ其村々入費ヲ崇ス成ル事

寺院近村ニ至ル向ヲ村々之便宜ニ随ヒ寺ヲ取壊不申ニ付廃撤

仕候様ニ還俗或ハ他ニ移住願出ル者ハ寺ヲ以テ寺院跡ハ別

堂ヲ建ル不苦哉奉伺ル以上

庚午八月九日　　篠山藩角人　赤見昌徳

市附紙

不都合之儀ニ付可申伺之通事

○

沼尻伏蔵ニ云ル其年月ハ七日藩知事ヲ以代相馬松大参事奈

勢ル頭ニ通鞠山藩ヲ廃ス藩ニ合併ヲ仰付ル旨ハ博奉服

ヲ達ス

一月日鞠山藩知事ヲ免本宅ヲ小淡藩ヲ知事ヲ仰付ル元ヲ十ヲ之一ハ

お家禄下賜ス藩ヲ太お内合ヲ得ル者ハ此ヲ仕ル

庚午十月十七日　　小淡藩　高木千石校

○

大坂市中市井ヲ写

自今平民苗字ヲ免ス事

太政官

十九月

右三通被仰付ル渡ス商家ニ成ル家号ヲ廃止ル旨ヲ

家号ハ是迄通リ名称ヲ苗字ニ成ル者ハ名合ニ考慮ヲ以テ唱

不苦成ル旨ヲ以テ沙汰也

但儒者医師ニ成ル家号廃止苗字ヲ称不苦事

右之旨四組ヲ以テ寄渡ヲ達ス年寄ヲ差知ス庭刻附ヲ以テ渡ス也

十月十二日　　大坂府

熊本藩知事願書

長護久丈郎代理石丈ノ一家族上ヲ下賜　天恩隆渥誰人雖有
仕途ヲ伺ハス如斯ニ至ル之金報内家私用ニ充ル義実法忘耀シ
至分十分一ニ過ハ内家用途ニ充ル筈内窮民振恤ニ用ル儀ニ忘
聖主厚慶載之仁恵ヲ奉シ民苦楽ヲ共ニスルノ微志ニ付宜敷御
取計被下度倫ニ奉願候ハ石恒敬白

庚午九月五日　熊本藩知事

出仕紙

本文ヲ上ニ振出之義ニ付願ニ通ス庚午

長護久謹按スルニ兵制変革セリ昔時之今体湯池金城ニ無
用之贅物ニ属セリ然レトモ其他分珠郡ハ鹿仁ニ豪強族刈獲織田氏
安土ノ業ヲ成シ諸豪ヲ効ヒ勢ヲ墨陸ヲ宮ノ元ニ虎ル即戦国之餘物
今ヤ　王化法流三治致隆乱世送世犯方隅ニ基時不ハ四海一家ノ
宏漠ニ障礙アルニ近ク熊本侯ハ加藤清正ノ巣処宏壮西陲ノ雄ト
称ス長カ家祖先ノ業倚ヲ以テ藩屏ヲ豈耳業ノ念無ラン哉然ト
雖モ維新ノ秋ニ膺リ建国ニ形勢ヲ為シ却テ管内固陋ノ民俗ヲ
改ヒ以テ島土ノ旧習ヲ一洗スカラス願ハ　天下大体ニ依リ熊本
侯ヲ廃藩ニ以テ民民一心ノ微ヲ投シ且以テ無用ノ者ヲ実備ヲ
速ニ伏テ乞速ニ明断ヲ垂レ長護久謹恒頓首敬白

庚午九月七日　熊本藩知事

出仕紙

聞届ル　庚午中

紋

西洋真傳一子不傳

月給凡

大方勅任四位以上一劃價自三百両至八百両
中方奏任六位以上同自百両至三百両
小方判任九位以上同自十両至百両

新政革ニ西洋真傳ニテ御一新後ニ偏ノ天下布告ニ堂上華族藩士草茅皁賤ノ

者多り共其方俗ニヨリ決断其ノ用ニハ忽身癒テ因循姑息シ臆病腰抜ナル事
不可勝数其功不用ニテ知ベキナリ甚一癸丑壬寅以来尽忠報國義名ノ英雄
多り共一度決業ノ旗スレハ大和魂ノ確乎タル赤心モ忽チ蕩シ内外ノ分ノ失シ治眼ト
称シテ洋癖トナリ己ノ身元卑キヲ恥シ猥高位高官ニ歴昇思ヒタクモ　天感ノ
徴ニ奉リ加之奸侵邪教ヲクラシ下民ノ塗炭ニ苦シヲモ傍観シ私慾ノ恐シ賄賂ノ
貪リ身ノ富シ家ノ富シ妻妾ノ美服ノ好シ驕シ長シ我侵ノ生シ怪怪ニ恥リ
目ノ安キヲ倫シテ太平心得枕ノ高シテ熟眠スルヲ奇妙也或老人醜男子タリトモ
忽チ美少年ノ如く流ス或房或又ハ多人ニ迄念ハ夢スルヲ神ノ如シ其化何事
ニシテ或事ナル実ニ不思議奇好良事也

役用中好物

有名無実　大法眼　洋癖　軽便　賄賂　軽度　献媚
國債　言行齟齬　邪侵　妾美高物　登楼　奸商

役用中禁物

免職　廉恥　暗教　樣夫論　國學　武術　議論客
正議　救民　志ス大禁ノ物也

毎日午前十時ヨリ午前二時迄開店
但一六之日ハ閉店

取次所　たく夫臺　大学院別當所
諸國　不破縣
調合所　両官堂
柯太國　ひとしやくん

御觸書写

自今平民苗字注義免ス事

庚午九月

右通達　仰出ル今平民一般苗字可ス唱ヒ本限山
堺ハ中社寺ヲ者濃未達ルヒの也

庚午十月

太政官

京都府

平ノ清盛知事建白

鴻業陵遲ニ後名義紊乱不至虞ニ世運日々汚下ニ流ル満天下
復大象ノ行物名ヲ石知唯利害受誘ル事数百年ニ亡ル国体固結
之流俗澆季衰運之極ニ方ニ世多ク悲況近来ニ至リ逆境事ル
ヨリ以テ俄ニ完運轉変改換生ノ純ニハ　大改更始ニ非ル偉業ヲ
振興改令一帰ニ時ニ遭遇仕事ニ誠ニ千歳一時ニ盛運
皇國ニ内事ノ欽抗輙舞ル仕者無ク事ニ出仕ル然ル上ル　烈祖
聖代ニ進範ニ非ル基礎中寡速ニ大津ニ到ル仕改ニ知ル則者ヲ
ヲ新改最大ニ非ル宗教ニ有ル　天神人ニ下人ニ恢ル　王政ニ大綱
紀ヲ振興内ヲ　朝廷ニ治體ヲ立テ廣ク天下ノ找ヲ為ニ其任ニ
任ニ天下人ニ方向ヲ定メ上下内外遠近ヲ一貫ニ通ニテ間隔ナク
無ク内外一視ノ仁政ヲ施ス　天下人ニ視ル其家之親之如ク
遊ニ我臣来　天孫ヲ附属之ヲ化人民ニ庶ル最ヲ重ク
ニ方今至ニ之ニ非ル和漢ハ非ル止ル奉法　王室ヲ推戴仕ル
ニ無不得止ニ而ニ非ル　右　ヲ仁政ニ廣ク新ル称ル

千里之外ニ所時ニ感動仕ル　天者ニ法必其実事ニ在テ空理無ク
変ニ無日度ニ出ル制度事者ニ上ニ於テ天下人ニ向背ニ不関係
安推ニ事ヲ起ル　霸術之用知ル者ニ事ニ在テ　王政ニ実ト
背馳ノ仕又近効ヲ念ニ遠大ノ順序ヲ測ル不用　変更時ヲ
不定ル衣面ヲ隠蔽ニ内ニ己ノ私ヲ挿入ル事ハ霸術ニ尚考サル
外ニ在テ澆季衰世ニ方称ニ之ヲ治ニ之ヲ為ニ之ヲ欲ニ
愈乱ル　和漢古今ニ是蹟瞭然明白ナル　今般ヲ更始
大改革ニ非ル奥起ル廣ハ可ル　海隔僻在ニ遠人或ハ未ル
王化ニ浴キ不知寡少固陋ニ化ニ不肖ル　朝改更議
変起多次第ニ出ル　近来公議不ル　上聞ニ儲ル見仕ル　内列
藩上ル一之上納金ヲ以テ海軍ヲ設ル費用ニ比ル　下ノ民相見ル
中ニ遠ノ熟考仕ル　天下海軍ヲ奥ル　当今之事必用ル
者ニ全ク収斂之術ハ不ル　者ヲ秋ヲ損益ル　ヲ廟議ヲ奉
称ル我ル所年数来　勇ヲ強乱ヲ重ル　義ル出戦ル論其外並ル
歎掌奮他仕事数年ニ久ク重國体消耗セサル　天下皆

朱書

度幣ノ極ノ上昨年五穀不熟黎民食艱ニ陥ル右様之事ハ古今相成ルテハ自然之流弊聚斂搾取之事情押移ル様ニ成ル列藩上下実況仁政ニ為悪難治ノ極ノ義必然之事ニ中世以来数十百年之廃絶ニ付偉業ニ回復ニ時ニ当リ改革之確定ニ人心未タ全ク文寛醇成塞之氣運来ル明ラカナザル時ニテ右様天下人心ニ背馳仕ル挙行ニ成ル実況大切至極ニ付内治強優ニテ国賊消耗愁嘆之声天下ニ満ル時喻ニ環海之各艦森列外侮全整ト雖モ其詮聊有之間ニ外防蚤ニ内治ニ時ハ国之懐乱脚下ニ実起ル之事ハ是又古今ノ確證君子事ニ臨ル時創業之障碍最甚ハ此中ニ出可申候ト考ル当藩越ル敬之器身ヲ容ル外無之深恐懼之至ニ存度存其沈黙ニ之義難忍ル外ヨリ不憚忌諱宸察誠以上表仕御願ハ此度之儀ハ断然事ニ基ク歌ニ成ル之大業ヲ防絶ニ成度愚意敢此事ニ存度ニ付上

庚午 六月

奔宸ニ中

水戸藩知事

源詮

九月ニ昔夜東京所々ニ投書ノ檄文 但白字 板膠

謹按、天下之勢、殆有不堪傍観者、因移檄以告四方有志者、蓋聖上臨御既経二年之久、則治化亘比隆 神武之世也、必其而倣、終至至此者、吉之助一藏等首奈乱綱紀而閑叟春岳等、又随而贊其詐術而已、向者使其藩士横山某等、投書以揚 朝廷之闕失、既尤岩倉徳大寺二公者、蓋出所謂黠奴忌家宰情而實襲構陷徳川氏故智也、且彼深忌 朝廷之富強、畫養兵策、則阻之論、減税方、則杵之、陽貴報本反始之 皇道、而陰奉蔑分乱常之洋教、懼諸侯之議其後也、立郡縣、説以撓其勢、悍天府之充溢也、昨鉄道信機等之冗事、以耗其財、詭譎百端、所以営私之術、无不至、又向使菜輿幸、異域、此事見于黒田之書中、則其藉手戎狄、欲以廃 皇統、亦已至彰也、夫已藏禍心、経営非圖者、必天道之所不容、漢駒蝦夷等之事、可以覩也、而独此賊依然固其位者、天未厭其悪耶、殆也為其所欺、未助天之也、嗚乎、物之生于両間者、孰不沿 天朝之恩、受秣其馬、砺其刃、戮力并心、殲之根株、

之迹

朱書

以為鯨封上荅天恩下劑衆庶之望豈非天地間之大愉快哉

庚午秋　　天公廳

別紙

曾テ徳川殿ヲ陷シ又天朝ヲ奉謀公卿諸侯ヲ滅サントシタル天下万民ヲ疾苦セシムル者ハ薩賊ノ大奸策ナリ

肖十八日来状之写　豊前千束ヨリ

千束藩知事山崎京良氏の家令下村準人福岡藩知事黒田氏使福岡ヨリ張飯ヨリ柳川の諜者ニ面接ス其話ニ須佐山ヨリ柳川ニ様夫の談判ハ行ハレ居ルヨシ事有る故猶ヽ手を廻シ探偵ヲ為ス也福岡ヨリ来月中旬ニ為城都を廃撤し中ニ移動ヲ為ス筈醸夫し居ること聞きたり様夫実ハ長の口実ハ行て恐ハ薩に侍る事なんと四国九州共悉く様夫論駁ハ西ハ芸州ヨリ唱手大変ハ必ず九州ヨリ起り世歌

一日本改府局外中立法ニ背ク事行ハルルイセニ人百姓を拘ラヽと云

東京ヨリ書状之写

歟度朝鮮ヲ豊臣氏征来之入朝ヲ省キ刺日本監察ヲ以人迫暗殺ヲ図ル既ニ兵端取結之論数度ニ一昨日當府滝口屯所ニ出卒操出ル事ヲ支那國ヲ英國佛ヲ魯國ヲ説ヲ敵ヲ一度ヲ戦支那國大勝利一昨日説出ヲ唱ヒ居ル　主上中ヲ西京ニ　御隠事ヲ横杯ヲ宮内ヲ混雑異形　御殺害ヲ伊延ヲ一六御年九ヲ有ラ

主上自ラ号令ヲ調伸ヲ為　御ヲ尊ヲ

午八月十二日

方今洋製兵衣俗ニ馬合羽ト称スルヲ是ヲ米人ヒッキニ問ヒニ米國ノ海軍ヲ兵隊ヨリ起リ支ヨリ英佛ヲ始ノ日本迄モ彼及ボシテ派行セリトカリフランゼットヲ着ニ煙ヲ問ヒスルヲキニユノ俗ナリトカ

静岡藩
氏名有出仕鉄道
小野文立市建白書

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5505535202

全國測量之義ハ正恐不可缺出来仕ラ七年ヨリ右若ク國他
共少地之廣狹耕地山川原野等ヲ區別シ之岡海嶋汐及諸
港淺深暗礁等ヲ詳近取調ル義ニ付度ク伊能勘定ニ測
量番共ヲ國番ヲ以村方里數等取調ル番回ヲ度ク外文
等を改正仕ル歩成切し歩取り結切之全番ニ来可ク共且経
緯度ヲ分明仕ニ於ク諸曜ノ西洋測量之遺暦ヲ法ヲハ其実況
を推算仕ル義ニ付其法則ヲ以ク仕ル級今八月食八地球ニ等
人君視度其食ヲ見ル之ニ於ク緯度ヲ推ニ度ヲ得ル者ヲ時刻も
急ク遠ク仕ル外是等ニ付キ取調ル義ニ付度ク依ニ付ク地測量仕ル
共遺暦測量等も本ヲ得ル者ニ無ク難ク成方之人員ヲ定ル
之義ニ付度ク度ク恐等ヲ以ク測量等ヲ本ヲ得ル者ヲ度ク以ク是法則
も了解仕ル者業ヲ本應之者数員ヲ撰拳ル成ク度ク者ヲ地ニ於ク
右法則教授之法ヲ之実測等ヲ試ル上ヲ等級ヲ立上ヲ測量
方ヲ人下等測量之方ヲ多人一組ヲ仕リ各所ニ遣ル仕ル外仕ル可
共ヲ存ル極少地共境界ヲ地ヲ初ノ山岳ヲ位置ヲ俗及周海諸港
淺深暗礁等共ヲ水使ヲ地ニ至近取調ル外ヲ以ク周極之ヲ
基本ヲも可成殊ニ全國測量仕ル者ヲ出之廣狹耕地山川
原野等取調ル外勿論ヲ来不毛ヲ地も水利ヲ因ヲ開ル或ハ川ヲ
堤防之自然ヲ結地勢之関係ヲ度ク是ヲ以ク取調
其一府廣縣及内海嶋汐ヲ至近各所ヲ仕至悉ク定リ上ハ全國
之模様思慮ヲ安ク其上航海ヲ方向不誤様成ル依之全國測
量ヲ義ハ不容易大業ヲ度ク度ク恐 度大改ヲ度基本ヲ
成義ヲ方今ノ有欲度次第ヲ以ク行ル度ク度ク詳義非常至
平ヲ度ク姫成様仕度奉建言仕上

慶午八月

周月民部省ヨリ進達ヲ

元家来ヲ者是近他ヲ籍ヲ生ル者共度復籍ヲ不苦義
此段奉伺仕上

慶午九月

山形縣

[illegible]

復籍[illegible]

○文武[illegible]者藩門師範[illegible]

庚午九月　上ノ山藩

[illegible]

○其藩[illegible]西周助津田真一郎[illegible]

庚午九月　辯官

静岡藩知事[illegible]

[illegible]

[illegible]

大久保静岡藩[illegible]

庚午九月十二日

辯官[illegible]中

大久保一翁　朝廷[illegible]上京[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 藝州廣島侯前に帰り夫遊惰且事怠に陥り人材更に乏く藩士と云
一 因備両藩藝に考ふ夫但因は自ら安分して進む事勿備は自ら
有の意なれば一変する時は開化に至る
一 長州山口藩拝冨藩にて人材も多くうちに慨数近頃人を失ひ藩風
大く衰ふ然れども藩力に於ては隣を圧する程なり三とも下
一 土佐高知藩力富強也名士風頃世変に接し変する者なり天下
一変する時は四国を併呑するの勢ひあり
一 紀州和歌山藩人材乏き故利し機を見て変する速也藩制変改
至妙に出る天下の目的となるものし他の事に至りては二三切して及ぶ者
長崎政多
一 筑前福岡藩人材多き故に廣貨の大事件を釀せり俗あるに此件に於ては
強忠憤と色あり他藩に倒撃の事知られて施行せり如の如
一 肥前佐賀藩上下懸枝拝分に獨立を冨藩藩委合と共に謀る
一 肥後熊本藩国方にあり下去藩風古律を維持し開化にそる事
遅緩せり

一 越前福井藩因循也楊春嶽有志拝戴と雖一事に為方向と雖
事多し
一 勢州津藩枝葉にて利と好き人材乏き因循に近
一 阿州徳島藩乱之知に似て併藩力知れと乃ち氏
右は極内にて此外畿内に郡県を置く陽封建
事を御定時勢遠く郡縣運ふを以上下太平の活中に苦多し其
拝修と創立する大の食と求る者に似て政府は日本刻を我物にして天
下は天下の人の天下たる事を不知愛之政人心離散之方今海外交際盛
此秋に申り人心を失ふ危哉

九月十七日 静岡報知

一 昨八日未八字比り大乱国家を倒一業木山林等の材を吹形安乱にして
切迫深水なる玄米に障列実に頻大乱に二万余り出り仕併今小
国夫を行長石頭に陣屋
一 達豆州に益列紀中清水漆に大船三千艘余艘船中に或艘沙方不知

一 義元藩士に向て宅地作らす蕃布致すし自力を蕃清逆作多分に
見込に者年て頼とる年賃も見込に者年に作る
世枝村 七百以上 或百坪 同百以上 百坪 同四三 百坪
僕に百坪作らす然に右代百坪に人に家作百坪或に皆出来
て役宮人も教事処世屋に凡災を不幾咳御大騒動○幕府因循
御儀使に成に職人を使に逆に処に荒に村民逆上に市至
大後茶家作に家に強き様に蕃新規家作多大抵に及に義元に
形に蕃清に義人者に名持倒者屋振に東京流に新規に
一 義元学校に茶諸藩士に学に寄寓 知者藩に事教授に月謝一両
方に者三人者に居
一 小学校規則定に○僕藩に昌林三郎方に入門に在に藩に同人義
者時静岡常平倉高法令に長に勤居に人方に會津藩熟生
命人に居に外各藩熟生に寄寓に○後便に者学頭姓名を
巨細に取調に先に義元に當年に豊作米價逆に下落
一 上去米者に年に年に伊油者京百文に者年に伊佐野今浅草
松平市に酒 東京道 走に伊に出に野菜に松に者に沼に浦賀に
者年に鰹不漁に鯉前高逆に其代物に原に野菜に
大振に年に松に年に房に本に市に食に伊故に毎日剰に中食に居に兵衛
之方徳利に年花瓶に事に外
一 義元二丁町遊女所に東京吉原に真似櫻燈に竜俄狂言に大盛に
今年秋に俄能に来に 俄行分田舎奥に不に実に雑者に見に
一 此程大角力興行に大入に田向院に屋に大きに来 見物に人に
角力に知人に話に事也芝居に休業役者に
近日大谷に出に凡に 古に来に 本に京に河原町に宅に
居宅に事に義元に来り 本に京に河原町に宅に 自殺に
出に 義元に三百人に祇園町に舞子に浦屋に 抱に義帰
一 大井川渡場に 松岡に寺周旋に 橋に架に由 箱根に
越に 大井川に橋に船に 越に寺に新に開化に 俄東海道に
沼に 義元に藩に屋に 藩に屋に向に二丁町に 越に者に中に

一静岡表開化に付き議士に向き近く出張の事

一□様に日く拙ひのこと此度中は毎晩大花火御更なること爰元花火は
なるべく不る上手也田舎に中て上ル玄軍神伝之祭礼は日本三花火之内也

松平典次郎家来諸〻之系図書とて差出分伊奈縣へ達なること也右典
次郎家を文代家合に中大文郎に為諸侯に為成今般士族に為成
は伊奈縣管轄にて成に付家来共三代以上之者を可調書なり
系図取持ちなる者は大に困却なると云

石巻縣廃登米縣へ合併ス　作出す事

庚午九月　太政官

酒田縣廃山形縣へ合す事

庚午九月　太政官

今般藩制ス　作出す事

正授大参事に内去人に立憲義来未年正月より出法て成事

判任に職員懸除其月〻て廃出事

一不ならざる義甲子之年より戊辰之年迄五ヶ年平均之物成を可修事

右之通更に達す事

庚午九月　太政官

一公制之義

皇國一般之法式を定ル為今般常備を負担定に付き海陸英
吉利式陸軍は佛郎西式鎮台は編制に成に際先番に於て陸軍は
佛郎西式と同的に御編制に成に付根本　作出す事

庚午九月　太政官

先般中諸藩より出張し鑛山司被に勧励ヒ故多数に洞に済て
右を東京本省に送る本省より大坂造幣寮に運輸一洞に新貨
幣不日に鑄造に成也

一厚札に高多キを於官省に悪ひ西洋紙を以て新造に成而後金張
新貨幣と申に付き廃花と雖も唯金張に出不多数西洋の金張
に置上に成根に就て有之

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5505535202

一福岡藩要請ニ云々事ハ至重大事件ニ付速ニ厳刑ニ処シ候ハヽ沙汰ニ及ブベキ筈ニ候ヘ共ハ知事公儀ニ於テ謹慎ノ或ハ別家ヲ入番ノ指止大出奉事ニ内巨魁三四名ニ永禁錮ノ遠嶋ノ中ニ於テ若シ事ト云ヘ共行ハ弾正台ニ刑律ニ書法ノ正文ニ紀ニ変議ノ行ハヽ如何ト云ヘ共有ル間敷ト存ル事也

○

午九月十七日依ル呼出ニ成ル之事書付ヲ渡ス成事

宇和嶋藩

福岡藩士澄川洗蔵ト嶋藩ニ事ヲ以テ

但弾正台ヨリ受取事

作者ノ事

庚午九月

右ニ付受取方ヲ以テ弾正台ヨリ糺問ニ及ブ迄ハ家ヲ応接ノ上ニ於テ書取ニ成ル

ヲ得ル迄ハ後ニ通同人ヲ以テ達ス

福岡藩士澄川洗蔵ト嶋藩ト事領ス　作者ハ右ハ藩邸ニ於テ

如何様ニ取扱ヲ但ハ屋敷ハ又罪ニ成ハ如何様ニ取扱ヒ成ル

右ヲ得ル上ニ申聞ル事

一罪ニ成ハ廃札ニ事ニ

一隠ニ百福岡藩大奉事山ニ藩ヘ出訴成ル之ヲ隠ス事ハ成ル間敷

若及ブ事通ハヽ沙汰ヲ成ル

一代人面会ヲ不成成

不及ブ場屋ニ沙汰ヲ成ル

一入湯ハ成ル免ル

一吟味ヲ不成ル丈ケニ成ル事可ニ成ル

一書人ハ成ル事ニ付ヲ

一遊興ハ成ル

一屋敷ハ成ル

一遊興ハ如何ト呼ハヽ而ハ沙汰ヲ成ル

弾正台内玄関上ヲ奉ル迎ヒ出席ニ付ル事

九月十七日ヨリ達ス成ル事

長州藩ノ一ノ石　石河太八郎

長州藩ノ一ノ石　山村嘉兵衛

長州藩ノ一ノ石　毛利源四郎

長州藩ノ一ノ石　毛利源四郎

長州藩ノ一ノ石　毛利源四郎

右ハ名古屋藩ニ成ル度ニ不達ニ付ル度ニ成ル之上且ハ私ニ通ル同族

終ニ日縣之黄ニ成ル事ニ成ル

右ハ人之事ニ成ル八十ノ一ノ人事ヲ通ル人ヲ

養ニ至ル者ハ人木藩ハ沙石ノ金ヲ取失ヒ丈ケ丈ケ減石ニ至ル

名古屋

と徳寿とハ其年至孝殊と之ニ　右四家ハ四年ト外戸七年一家ニ

九月廿九日達

金松縣貢戸　作米ノ事

山村喜ニ付

基隆ニ内其流元知紀糸金松縣ト管轄ス　作米ノ分地ニ引取

下申事

今般金松縣貢戸　作米ノ事　従前家禄十分ニ一禄米ヲ

下賜ノ事

右三隊合通ス

金松縣貢戸　作米ノ事

山村基ニ元家来

庚午九月廿七日

右之外　久ヶ利　千村　毛利　坂ノ上人前ノ分

髪制

一　作乱ヲ後ニ俗ヲ易ル事ハ國ノ大典軽ニ変ス之ヲ妄ニ歩ル紀事ニ非ス然ニ

近ル新法ニ髪作程ニ束ネ或ハ総髪或ハ三髪髪或ハ束髪或ハ束ネ

髪婦人迄モ髪ヲ廃一概附ニ成ル者ハ勿ニ容ハ是ハ之ニ而ト云ル如

ハ容ハ容ル時ハ又ハ必容ニ依テ使ヒ者也況ヤ髪ハ

人身中ニ最下ケ高崇ル物ニ外ルハ髪容ル者人公隠テ以テ

事ヲ済ス法朋人ハ夫人の奴隷ト成ス俗ヲ不改帝權ヲ持ル

皇國ハ後来ニ國ニ比類ナク玉極ヲ清来ル俄ニ凡乱ヲ俗ル

我俗ニ形ニ変リ易ハ思ラクハ　近改俗ニ伝ル者ハ奏任以上

悉髪以下束髪ト成ル或ハ花族以上悉髪以下束髪ト成ル或ハ三位以上悉髪

以下束髪ト成ル或ハ一位悉髪ト成ル或ハ一位束髪ト成ル或ハ一定ニ凡俗ニ

束髪ト称ス者極ル事

庚午十月廿二日　朋高藤橋ニ札場ニ貼紙ヲ写

大奸似忠真忠ノ忠ヲ作スヨリモ憎ル如ニ雖然見ル目ヲ以是ヲ観聞耳

ヲ以是ヲ聞ヲ聞ハ退ル動作　判然煙然尚不入髪也矣　作

王改御維新ニ属ニ付リ院ニ三年ニ近大小ノ官員悉ク各其器ニ不當

ト雖其職タル強ヲ政綱ヲ維持セント要スル然ルニ昨秋以来上下ノ人情何トナク紛擾公明盛大ノ叡旨民間ニ不通追日困窮スル而ルニ廟堂大臣神手傍觀ノ如シ依之有志等ニ合セ東ニ奏西ニ奏周旋ノ極メ終ニ今日ノ形勢ニ至ルヲ知ル其訳天下ノ有志北事ニ示シ薩州西郷吉之助大久保一藏等大盜ノ志ヲ抱キ畢竟王政復古ヲ真術中ノ一事ニシテ民心ヲ離間シ廟堂ノ中名望已カ右ニ出ルモノヲ黙ケント謀ル真實少シクモ過日於東京薩藩横山正太郎ナル者諫死ノ体ヲ為サシノ書中ニ岩倉徳大寺ノ事ヲウツ是亦二奸ノ術中ナリ或ハ近来慶喜ト親睦シ水戸庭内等ヲ手引セント謀ル事王政ヲ解ヲ謀ル此期ニ乗シテ東狄ノ醜風ニ倣ヒ妹々ル神加ヲシテ天子ヲ棄シツイヒ合衆國トナサシメ已ニ是カ大紗領タラント企ツルモノ神加ニ生シ神加ノ禄ヲ食ムモノ誰カ敢テ切齒扼腕セサラヤ依テ義策忠謀ヲ以不日此二賊魁等ノ生首ヲ引抜キ天照御神ノ皇統ヲシテ億萬斯年ニ傳ヘント欲ス

明治三年十月　　草莽有志誌

右三日之間張り置可申若此間ニ破却イタシ者ハキツト後日可相乱モノ也

李漏生虜地「セルヒヤ」仏蘭西之会船ヨリ大戦李軍大敗ス名之将宋戰死ト申事去ル天李軍之ハ去年一月毎ニ佛ト地ヲ李之方ト取志死リ之者進ミ取志死ル者進ミ国外勢ヲ人の話之由

一横演ニ李佛事件ニ付仏事故混雜ス中ニ外勢有側ヲ有

文ヲ配シ仲也ヲ云

一佛帝ヲ生捕ハ実説也佛ト國民共ニ不在共和政派ト法ヲ建テ李ト戰争ニ及ヒ敗ル勢ヒ佛の海軍ハ李の地方に向ヒ雖モ李軍拒防シテ入事不能佛國の敗軍ハ其後ヒ自反シテ李ヲ却ル也也然ルニ李兵奮発應戰セリ敗不覺ヲ取ル也

一外國人真生李ニ生捕ヒ不愁敵ト戰ハ不忠ニ似ルヲ是日軍人の説ヒ洋人ハ國ヲ奪ヒ命ヲ死ス國辱ヲ話ニ不堪板に佛ト國民悉ク之ヲ敵ヒテ歌ヒ戰ル

一日本國ヲ不開戰争ヲハ千手將軍に似テ元事角行ヲ失ル附ハ毛解失將軍困術ヲ失ハ古廣陸困術ヲ失外國ハ如北事ヲ云

佛國公使書翰之写

外務省より発送の為仏国へ達し也

慶応十一月

横浜千八百七十年十月廿日

民部省

以紙片上仕候 貴国七年戦争之帝我皇帝捕虜之為仏国共和政派と市共政之辰閣下へ報告致候 巴里斯都下に国家保護之為改府と唱候大将 トロコー氏ノ右伯里京天徳と称候全国中人力於難難 陥候 許武雪之張不絶交戦汝 詳交汝 ハ左和議家 佛国之英君ノ毀損セサル 正至 之 ハ交ノ兼諸政ノ為ノ必

佛國公使
ウートル

澤 外務卿
寺島外務大輔 閣下

松平福井藩知事

異藩士族本家格之義之如 家格之義之如 幸人頻之 委曲言之筋
なく事沙汰難出及ハ為 此辰 達しの事

鹿児嶋藩預書

近年未徳之従伐藩力不相應之入費到連年出荒且穀不熟殊
去ル七月藩内同大風禾稼五歩通り之損失ニ及ヒ 且又積年外
國人借賊英太ニ 迫 外国丈し朝廷ヘ 実ニ四民飢餓
ニ而五如何ハ 仏配仕 候者時 拝 奉迫入 此涯激之事
中上度事度ハ 情実者 法 級 ヲ称 事 歎 奏 歩下度事
預上仕候上

九月廿日

鹿児嶋藩

在京事中

有之事ニ付
何之通下者事

東京府貫属士族
大蔵少丞
山本謙助

是方式去辰年九月廿五日期限後ハ出ル者ハ高絶身上賜
朝廷ヲ顧ミ向期限ニ須臾ニ一旦年領安堵セシ者甚多ク代ニ武威ヲ
失ス通ハ 作者曰
戊辰春無之念朝廷ヲ武威ヲ若ハ主家ヲ倒ス如キハ柳石憂一番
年領安堵ヲ志願セシ也 後ニ至テ朝廷ヲ顧ミ若ハ主家ヲ抱キ
日和ヲ考ヘ而ノ朝廷ヲ武威ヲ通宜ニ士族ヲ此分一代限リ之
相庭ニ至テ多ク

一 神奈川縣ニ於テ脱刀或者ハ波曰
右脱刀ニ義神奈川ニ於テ開港場近ク日ヲ経タル
ヲ一方今長法戦争ニ武職ニ至ル迄皆西洋ニ採テ以テ之ヲ
用ヒ其皆横浜等ヲ開ケタル事ヲ聞ハ脱刀ニ事ヲ神奈川ニ
開ケタル迄ハ海内ニ稀ナリ端緒也 且士族ハ帯刀ニ帰農商
ヲ可セ考ヘ時勢ヲ為ハ脱刀ニ物ヲ廃シ如キ若果シテ
然ハ西宗真宗 勿真宗ノ名刀ヲ鋳潰シ鍋釜ノ用ヒ遠慮ヲ成
ス如ク 即今事開ノ中武士臭キ因術者ハ僧ヲ
論セス意ラ也ハ云云

庚午閏十月七日 此日朝ヨリ雲昼前ヨリ小雨降ル

東京城火薬激発風聞

同日午十二時頃東方ニ当リ雷震ノ如ク激発炮声ニ等ク鳴響キ
此時中間屋降リ激シ打ル為ハ甚真偽不分打病所半壁ヲ
呼ブ出火ニ為ル〻〻行テ言ル事ヲ知人ニ東西ニ奔走考ヘ甚
内火元見ル者ニ接種門門ノ内ヲ為ル者ヲ報ス義ニ作天甚内ニ小
声度ニ及ベリ東京所失消ハ止ル出張役員ハ汗馬ニ跨リ
陣笠ヲ冠リ雨傘ヲ持ル如クリテ一様ニ右場ハ全ク内桜田門ノ之
内ニ於ル方ニ三重角ヲ櫓之除 和田倉門ノ内 桔梗門並角ノ 之寶蔵三ツ並建ル之
中ニ武蔵ヲ為時合薬ヲ蔵ニ武器ヲ此外同朝廷ヲ鉄炮蔵ニ武器
械蔵ニ武器人ヲ都有ル之中身ヲ盗ル近ク大業ヲ 焔煙草休ル
武士奔動ニ及ル也 犯人ノ内或人ハ其ノ方ヲ石知郷リ或人ハ

怪我のことを云諸大防之者し氏張多く遠くより水を負るのこと甚肉多く
発生の度毎迷出之者のこと多く混雑之人方如也聞り神祇官にてハ
白木之事長持三掉警衆厳重にて教書座搭事門外を通り芝ノ
神明に事主返也真先きハ花と記方ハ次ハ中央の札旗ハ右と記方
とふ當宜金く風下出方り也四西尼下迄ハ一四に所大防主固ノ真
余作賀藩之隊球に多く皆高知之藩之兵隊と列方と言り右両藩之
兵隊ハ帰国ヶ恐ちくハ真余方つ〻ハ藩くに兵隊主固ノ西城之事大報搭
兵部省附属方り
之者第四ノ事布告之大事鐘と方ロ事城迫ノ三ハ意外之弥事恐多くも
主上ハ所別御見却不事座に事動座主成る由潮ノ土二字頃金ノ鎮静
及べり

一馬取藩知事池田氏之事家池田徳潤池田徳良主人岳家合係
主成程主元更に知藩事主顔事沙法難主及振ニ閏十月初旬
東京主位非役之華族に改作方り由

一熊本藩ハ大蔵作兼家ノ周旋家ト唱ヘ勤王家と固陋家ト称し

一全生藩士主誘に知事公大に感激し多ハ累代之愛恩什物を藏ト出
不残藩士に分與り多ハ狐金銀の器物ハ尊く涛岳一棒にして非常の
備と事家族ハ城中を掛て郊外に住居農事と
勤める故藩士固術方事手伝居方ら農事と
勤める故藩士固術方事手伝居方ら農事と
重代の器物ハ諸貴掛ひ方と知計感方に金ノ方

十月諸藩関書摘要

久留藩

一秀戈之者庶民より抜擢刑任江上登庸に命ず士藏中喜又子ハ庶民ノ
取扱ニテ豆ノ紋又ハ士族ノ取扱ニ任ず
士藏中年人ハ士族ノ取扱ニ陞ル事
一海軍資上納之上ハ軍艦蓄養ハ外藩内海防に関スル入費出行ハ
公得ル事
海防に関スル費出之入費共可ノ出事

藩制

今般平民苗字名乗被仰出候ニ付テハ自今苗字取扱之儀ハ可考同之通事

一従前苗字名故ナク名乗ノミ唱来リシ者共自今苗字名乗ニ唱ヘ申ス可事

但苗字考ヘ唱ヘ之儀藩廳ヨリ取申ス筈ニ付

同之通

作合藩

叙任判任

叙任大廳ハ上任職中功勞ナク老病ニ及ヒ等ニ退職之節遠ク史生廳掌ニ下タシ列ニ名ハ禮式ニ於テハ官員ニ功ノ軽重ニ応シ其事務ニ相当ル者ハ其事務ニ称シ班位中ハ上ニ次ニ列シ其ノ官員ニ準ス可事

退職之後ハ花立ニ任シ訳者ハ勤務ニ者ハ名ヲ中

藩庁

當職ハ典事ニ書上之儀明年ヨリ書ヲ以テ申ス可事

同之通

一軍校ニ内師範教授ハ従来ノ通ニ付テハ七位以下ノ位階ニ為適宜ニ分配仕ル筈ニ付

但医師ニ対シ本文之通ニ為ス可事

一隊長ノ旅隊役員及旅士等位階ハ追テ一定ニ付規則可ス　作出ス

追テ一定ニ付規則可ス　作出ス

中村　三春　二松年　経石城年　一ノ関　守山　泉　湯長谷藩

一革ニ付不称物成ハ可称ス　仙台藩ハ西秋中水中石ニ収納中分米ハ内ハ石米分石米ニ付ニ石ニ付ニ付

一陸軍費ハ常非常ニ隊雇費徒ニ陸海軍職一切之制度ニ準ス

但大人費給米帳ハ先ツ之儀ニ下ル事

同之通

一士族卒族家禄之儀ハ朝廷ニ付制度ニ準階級ニ至テ取扱藩ニ便宜ニ可取扱事

一非役之士族順席ハ廳掌之次ニ家督順之儀ニ致ス

準席等事

宮川藩

拾大年中ヲ要真便宜ニ考

右便宜ニ考昨年以 御達之通三名振金石若ス

正權合ニ而人ニ名ニ相不成事 但若ス減者不成事

一常入米出明細書年表ハ藩改革之上書十月ヲ来九月迄之分差ヲ多ク之ハ古ノ得不ス

同之通

延岡藩

正拾大参年東京詰取限ニ表半年文代可仕ル得共遠国等

勘合ニ考或一年文代可仕ル石若ス

但現則ニ通可ル得事

一家令家扶家従官員ニ対シ相当処行ル古ノ得不ス

等行者之事

一大年中以下重祝之祝ハ解任仕ル命ハ非役士拾ル二石扱ル

不ス

同之通

一士卒族帰農帰商願出ハ聞届不ス

但従農従商ニ要之士業ヲ之分ハ相当ニ養係年金ル年ヲ古ノ得

不ス

同之通

一四民神葬祭儒葬祭願出ハ聞届不ス

神葬祭同之通儒葬祭先可見合事

一四民婚姻書通ニ願出ル聞届不ス

同之通

一藩廳或ル発地出張ル玄関ニ家号紋附幕提灯使用不ス

同之通

一寺院同宗之分石都合ル之得ル引渡不ス

同之通

一改革掛ヲ置期限ヲ定メ右如何ヲ問フ事ヲ定限ヲ設ケ成文速ニ工夫運事

一諸藩改革同書ハ別紙之陳ク慶ク習施行ヲ待ツ事

同之通

兵部藩

監察向ハ無藩必ヲ主ヲ定ル事ヲ度ク

向ハ主ヲ右及ビ分課ヲ設ケ直ニ事務可取扱事

一一時ク賞美流刑法下刑収録之外 作出ル右ハ一時ク重賞美流法ヲ

重刑ヲ已ニ小細目ニ渉ル事ヲ度ク度ク事

一廳掌等級多ハ史生ヲ主ヲ重ク多ニ事度ク

同之通

○

東京ニ神葬進ク北海ル葬地ヲ設ケ議ヲ上令叔麻

市中張迫ル葬地来太政官ハ祈祇官ト引渡ス成ル

象伏見宮先達ヲ洋行ヲ発遣ヲ之

十月十日頃神戸ヲ出発ス

ヲ条約ヲ又ヲ夷ヲ事ヲ

ヲ室諸大夫矢野氏ヲ室ヲ事内外

洋来北東京貸附当政府宮中集

ニ対平今弾屋ニ留ラ色在之ヲ右ヲ事件ニ

法ヲ荒ク右ヲ名ヲ室屋ヲ店出

一近来横浜賀裏銭ハ近ヲ去用ヲ当時洋銭ヲ換敗ヲ横浜賀ク

持来ル陰度ヲ端ル

一薩藩漢学ハ盛ヲ洋学ハ微ク

一近時沼氏湖水ヲ加藤ヲ気服通陸ヲ目論見ヲ沼ヲ之由

ヲ人ハ小倉長池淀藩内沼ヲ見ヲ之版善国教師「イマニ」「カービニ」

ヲ人ヲ雇ヲ上京ヲ教ヲ由右掌内ヲ旧會津藩士当時中学校

多リ山本角馬洋学ヲ漢学ヲ右善郷導ヲ作ル由

一反振管内先頃動揺ヲ事件ヲ出ル米惣罷用ヲ重臣等各変機

謹慎ス 仰付米恕共改易ニ成ル事

右之通ニ付為ニ得及通達ニ也　　任大納言

庚午十月

○

右勤番ス　仰付ル事

内書所集入ス　仰付ル事

庚午十月

○

春日祭　大原野祭　吉田祭

右是迄年〻出度事ニ付ル自今二月一度ニ出仕之ニ成ル自者ハ

得及通達ニ也

庚午十月

上親町三位殿刑部卿

留主長官

上杉從五位

同　人

太政官

留守判官

一 牧野從四位　同從五位

右自今内書不集入ス　仰出ル事

午十月廿四日

上京元中下大夫上士稱号改士族家禄減石ニ付ル并鍋頸為時諸官身

出勤姓名録

鍋頸　三條西馬場　京後通ル廿七町上

村越三十郎

一 高五百石　元高七十三石高七十石三斗九升四合　石川　勝

一 門百五石　元五千石　最上從五位

一 門百五石　元五千七百石外七十三石　大給　永馬

一 門百五石　元五千三百石　武田　太郎

一 門百五石　元二千三百石　森　宗七郎

一 門　元千五百石　谷　陸三

一 門　元千石　丹羽小左衛門

一 門　元千石外七十五石　渡辺嘉一郎

関　治郎

一 門三百石　元九千五百五十石外二百十四石八斗　横田　拾之助

一 門五百石　門七千石　酒井　富之助

一 門百五石　門五千石外千三石　戸川　達敏

一 門百五石　門四千五百三十一石　甲斐庄　源吾

一 門　小出部三郎

一 七十五石　元千石　小出　助四郎

一 同　元千石　渡辺　鎮之丞

一 同　元千石　根来　左衛門

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5505535202

一門 廿五石 元七百石宮 矢橋子三大夫 一門 元七百石

一門 元七百石外七十石 松波陽太夫 一門 元六百石 宮内権大録 朽木五夫右ニ門

一門 元六百石 苗字支給 坪内嘉多系 一門 四十五石 元六百石 門上 小堀右膳

一門 元五百石 中井保三夫 一門 元五百石 元七十俵 菅我豊之助

一門 元四百石 三輪嘉之助 一門 元四百九十石 施薬院

一門 元三百石 苗字支給 柳原清記 一門 元三百石 上林已之介

一門 元二百石 宮内省掌 木村宗左門 一門 元三百俵 但三十五人 岡部權八夫

一門 十六石 元百俵 角倉波沢 一門 元百俵 宮内省掌 石原清一夫

一門 元百俵 里村昌同 一門 元七十俵 藤林玄丈

一門 十石 元三十人扶持 山脇道作 一門 十石 角倉伊織

一門 十石 伊藤七夫 一 賞典廿人扶持 渓海槐堂

以下八月十九日士族より名加

迎賓房 高木一東 宮内省掌 和田武雄 廿五人隊士 兵部省掌 梶山貫三

京都府 名 種治人 門上 吉井貞七 門上 松田誠三

依願免本官 久世宮内大丞

右之通ニ付為御及通達也

庚午閏十月 留守 判官

諸官員義務下 京都府下人民家業ニ在相命義務者

門府ニ可伺出服者之命ハ其類先何事ニ付度旨届出事

但年季半季 相定年季力之者ハ門限ニ届出事

庚午十月 留守 官

越後國長岡藩士廢ル事

京都巷説

一 大宮御所隆学院ニ行幸之義 当風気事延引ニ付 伺之事 行幸義東京

ニ付書 成法俗説紛々巷説事主ル事

亜墨諸事 稟令 当春上之比知則事主 黄代事ノ苛政 亜ノ解

通日人心失望之気配 未移ル事

一西京四隅ニ出来候伐採島他開拓之事ニ付諸藩之人入込候ハヽ
御用之処今迄度々人数之中右義申越候ハヽ狙撃之極難多有之故宮濃
一ニ御渡ハヽ忽チ障碍を恐レ故之由
一二條城中ニ出張不致ハヽ金津藩ヶ欠而ニ付ニ諸藩出張頂日ニ相之由
一昨十六日留守居中御門番之ニ御免ニ西京之角ニ取詰ハヽ集ル
絵日角ハ取ヲ見物之由

宮先兼義之面ニ家士三代相恩之者取調ニ付ハヽ先般ニ達之義
別紙
一甚家ニ付ニ拒之由御先年月　一ニ拒ハ初代ハ義代一徐録義代
右明細ニ取調来閏十月晦迄ニ可差出
慶応十月十八日
一三隊西従三位殿新潟縣知事在勤中右ニ合之次第ハ之ニ付例
之通謹慎ス　伺ハヽ
慶応十月晦

慶応十月十五日ニ布告
諸藩　朝集ノ順次四季ニ更ニ三ヶ年合テ十二番ニシテ一周ス其順
番壁ニ未ノ春ニ當リ夏ハ午ノ冬ニ第番未ノ春ニ二月在京夏ニ三ヶ月
帰藩スベシ以下皆同例ナリ若一季中閏月アラハ四ヶ月在京ス今事
慶応九月　太政官
未春　戌丑辰年同
和歌山　久留米　小濱　佐倉　豊浦　膳所　杵築　竜野　岡崎
吉田　亀田　高取　壬生　福江　太多　岸山　石岡　泉　野村
成羽　堀江　六浦
未夏　戌丑辰年同
熊本　津　米沢　福山　明石　大聖寺　村上　亀岡　加納　堂原
長尾　高梁　飯田　墨石　清末　多度津　伯太　三池　矢島　谷田部

多古
来秋戊丑辰年内
出 久保田 富山 中津 宮津 高鍋 上田村松 人吉 西條 廣瀬
水口 上ノ山 岩槻 八戸 外谷 伊勢崎 小野 結城 椎谷 岩村田
當我野 下妻
来冬丑辰戊年同
静岡 姫路 平戸 前橋 亀 三春 土浦 久居 沼田 亀岡 府内
飯野 岡田 大溝 彦部 丹南 平原 今尾 新谷 梯 吹上
高岡
中春 癸寅己年
作賀 岡山 郡山 大垣 中村 鶴舞 今治 豊橋 笠間 園部
作伯 安中 長崎 清末 麻田 西大路 林田 母里 萩野市 館山 小見川
作野
中夏 癸寅己年同
高知 福井 大泉 嶋原 松本 館 高槻 亀山 菊間 福知山
出石 一関 日出 赤穂 鴨方 長岡 吉見 黒羽 峯山 生實 松岡
西大平
中秋 癸寅己年同
金沢 柳川 仙臺 津山 延岡 西尾 大洲 小城 高嶋 本庄 足守 久留
岩槻 柳生 与板 郡山 苗木 七戸 禾東 福木 山家 志筑
中冬 癸寅己年同
徳嶋 松江 豊津 忍 岡 大村 来名 宇都宮 田辺 鯖江 岩村
小諸 鶴田 田原 鶴牧 安志 加知山 磐城平 小久保 田原本
七日市 完戸 生駒
閏春 子卯午年同
名古屋 鳥取 高松 敦賀 臼杵 徳山 古河 秋月 新宮 三田
柴山 飯山 庶嶋 柏原 棚倉 高須 峯安 半久 新見 出上 荒野
三草 大田原
閏夏 子卯午年
福岡 松山 新発田 淀 厳原 岩國 川越 新庄 高遠 真嶋

松嶺　神戸　関宿　豊岡　山崎　三日市　芝村　庫生　須坂　西端　櫻井
湯長谷　斗南
同秋　子卯午年同
廉児島　弘前　高田　松代　岸和田　小倉　舞鶴　唐津　郡上　島羽　庭瀬
三日市　下館　天童　守山　龍岡　黒川　作貫　宮川　小幡　村岡　大網
足利
同冬　子卯午年同
廣島　彦根　水戸　宇和島　篠山　飫肥　津和野　尼ヶ崎　二本松
大野　花房　犬山　重原　鳥山　柳本　森　小泉　一ノ宮　小松　浅尾
高富

以上

上表人材擢挙之議案

要ト主眼ニ為ノ天下ヲ治ムルヤ善ノ天下ノ人ヲメ君子ナラシムル手段ニ外ラズ曰法則ヲ主民ムル国ノ費四討ノ設ケ百工ヲ勧ム是故ニ天下ヲ治ムルノ道ハ其人ニ非スメ其法ニアリト雖モ宜其法ヲ固取メ然ハズ行ヒ行ハシムル其人材ニアリ堯舜モ人ト同キ已ニ其法ヲ渝テ行ヒ下民ノ悉ク行ヒ公ハナリ方今大政吉ヘ復シ神聖英武帝躬親ノ善政ヲ即シ旧弊ノ汚俗ヲ新シ東京ニ降臨シテ四海ヲ鎮定シ遠ク仁義道徳ノ人材ヲ登庸メ高爵ヲ授ケ自シ廣ク海外ニ接シ教勲欽明実ニ開化ノ際文明ノ機ニメ天下蒼生傾耳側目夜進ノ仰ク秋シ以應負素ヨリ浅短体トシテ一新ノ陰ニ過ヒ苟モ国恩ノ知ル者敢テ黙観スヘキ時ニ非サル也謹ヲ惟ルニ近頃朝廷人材ヲ擢挙スルヤ或ハ疲飽庶幾ニメ家治ニ堪サル人或ハ多忙況奇宥ニメ食ニ乏キ者悲ノ官ニアル知音旧交ニ憂リ仕官ノ乞フ旧宦ヲ官ニ媚ヒ是ヲ拓ク其任ニ非スト雖モ奸媚ニシテ日夜煩労シ厭ハズメ此ノ乞フ官又其切ナルニヨリ自ラ恥ヲ容レ忍ス乃同気共相報スル登庸ニメ無類蒼隆ノ徒ノ為シト雖モ而今大改ニ寄ヲ為スコトヲ要シ是故ニ食ニ餘ノ職ヲ思ハス素リ食ノ為ニ任ヲ乞ヒ勤ムル者シ何ソ其ノ身ニ竭シ天下蒼生ノ為ニ一死ノ以テ勤メ報スヘキ人材ニ非サルヤ丈男子世ニ出テ豈ニ徒ラニ過ニヤ強ノ社稷ノ為ニ身命ヲ抛ラ聊カ徳ヲ

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5505535202

進ノ業ニ益アラハ死スト雖モ是最上ノ幸甚ナルヲハ古今青史ニ瞭然ノ儀ニ
乾坤間人材ハ真國ノ至宝ノ強弱ノ要 聞化ノ大本ニシテ臣應負謹惟ニ
之ヲ天皇スルニ民部省ハ毎歳全國ノ民口ヲ閲ニシテ戸籍ヲ造クル
ナレハ頼クハ此ヲコノ省ヨリ府藩縣ニ戒令ノ毎歳ニ士百人撰挙ノ以其
材能ノ試ニテ商議審細ノ取捨セハ必大材ノ擢クヘシ此今日ノ大急
皇國ノ大事ナリ然ルニ其規或兩京ニテ三人或府ニテ十五人六藩三十人
小藩五人トシ各地管轄下ヨリ郡舎ハ勿論山家邊鄙村落海浜嶋
諸岐峻等遠我 皇國版圖内人家有ル限リハ士農工商巫医
儒僧等生産ヲ問ハス法実義人ヲ物量詳細ノ見聞採索セハ必
紀圖内ヲメ凡一千万人ノ名ヲ記スベシ其中ニ於テ再應其人々ノ生徒学
識言行等ノ来実ヲ審細ニ研詰シテ士百人ヲ撰挙ノ其人材言行ヲ
敢テ府藩縣ニ受懦曲誤ナノ問難商議ノ確ヲ記シテ悉ク其管
轄下ノ英士トナシ各其知ル其證人ヲ活人附ケ是ヲ 朝廷ニ薦クヘシ
朝廷又其文質言行ヲ照議鑑定ノ以テ悉ク官省並府藩縣
等迄其材能器量ニ應メ命賦スベシ然ノ所謂使食ノ士ハ直ニ免除シ
而是ヲ三五年モ行ヒ竭セハ彼日乃相列ノ登庸ニ非ス正謂郷里僉ヲ
徳ヲ望ムノ人材ヲ以テ自然ト其人材ヲ諭揚スル故ニ二年ニ其材識ヲ
以テ学識事実ヲ監議スルモノナレハ自ラ薦議開達ノ人材ハ増加スヘシ
后思フクハ三年ヲ経メ罪人ハ減少シ窮民モ自ラ活ル道ヲ得テ人材選
挙ノ実功ヲ天下ニ示サン実ニ開化文明ノ時ヲ知ルヘキ故只管薫行ノ士ヲ
選テ三善良ノ人ヲ挙ケ各々其材能ヲ尽シ官省府藩縣トヒトク
メ其職ニ身命ヲ関切シ以テ 皇帝ヲ補翼シ事社稷ニ関ルナラハ彼ノ邊陬
ノ進者モ我力德行ニヨリ今其官ニ在テ國事ニ関リ此期會ノ商估ハ
其職ニ奉セシタリ其藩ノ士ハ今其官ニ在テ國事ニ関リ名誉ノ人トナ
自然ト上下ニ幼年ノ其常躬ノ改メ草業ノ研窮シ行常ノ正クノ各
々其天性ニ応シ或ハ士農工商或ハ儒医ト其好ム所ニ執リ行ノ琢磨シ知覚ノ
切瑳ノ共下ノ悍リ下ハ上ヲ思ヒ悪行ハ自然ト減シ人材ハ日月ニ開成シ実以
全國合衆協和政度トナシ現今ノ如クニハ上 聖明ノ徳沢モ下邊
鄙ノ賤民苅婦迄モ感戴解服ノ所ノ消スシテ御里山沢ニ法紀絶義ノ
人アリヒ高岸近シ黄徹セス口市街山野ニ在テ犬馬ト共ニ一生ノ井ル四已ニテ

不謂伯學ノ士世界ニ人材アリテ社稷ノ為ハ微塵モ寸スシテ去歌クヘキ
其民トメハ父母ヲ不知其父母トメ帝王ヲ火フコトニ似タリ何ソ國カラ揚スト云ハシヤ
其人材ヲ尽サスシテ親ソ能海外ノ開化ニ倣フヘシヤ我小國ト雖モ合衆恢和ノ
以 皇帝ヲ補佐シ人材一挙シテ尽カヲ震ハ何遠彼ノ洋夷狡兒ニ屈センヤ
振前苦ニキ事体シ是皆旧政ノ失ニテ自然固樹ノ國カヲ無ニテ来ルユヘ久
ヒハ開ケサルニ非ス尽ササレハ皇國カラ更張スルハ人材恢和ノカニ非ラスハ
変ノ長キヲシ現今干戈ノ後旧政ノ凡ヲ存シ上下隔絶ノ勢ヲ養ヒ罪人ハ
日々ニ増加シ若窮民ハ日々ニ困窮シ天下国形ノ大憂ヒ生セン嘆ハ
亦伝ヘ時カ三年ヲ待テ士崩ノ勢アリ実ニ天下ノ事不可知ハカ日
夜済法ノ國家形勢カヲ憂ヒ斧鉞ヲ肩ヲ以テ叫リ建白スル外ナシ抑キ
ヒラクハ速ニ府藩縣ニ威令ノ人材選挙ノ法ヲ一定セハ國家ヲ維持
スル而已ナラス自カ盛大ナルヘシカ誠以固陋ノ暁見伏翼ハ電覧ヲ祈ル
臣臨稟等惶敬白百拝謹言

庚午九月十八日

臣谷暘卿涼應負

京都府下中学校ヲ開ニ付義族姫ノ士度人ニ至迄入学ヲ願ノ事

留守官

閏十月

太政官

但開業日限ハ追テ可達ノ事

○

社家ヲ宮義族家ニ兼勤ス度ノ内三代以上ニ者ハ行事ヲ以テ永
主ヒ方ニ去帰一可ト出事

庚午閏十月

留守官

一義族之事年来拾年ヲ限ル額ニ至ハ可者勝手事
但廃疾及半故ニ罷リ出事ハ非此限

一山口藩初ノ義外兵隊ヲ遣ヒ為仮今度ノ御ノ義仮士度金ハ
戦内二ヲ度金ヲ下ル

十一月

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5505535202

汐凋章筱宿長ニ為者去月九日七字出火ニ付舊藩邸焼
亡ス知事齋別係二九ト立延藩庭ヲ不ト去ル立ル多松山表ヶ
ヲ来ル者表為用知ヲ長ニ下ス表

十一月十一日　松山藩

○

李漏生人
イマン
リエウドルウ
科理人助人

通免人
河原一石

右十二字伏見奏ス河原町二隅ヲ角倉屋ヶ末名

十一月十日

十月二日
民政省出仕　堀尾主典

同三日
煙免本官侍讀　玉松從五位　第大学大丞　神田集議判官

兵学大助教ス
作ル　（南）中大助　本山衛吉　近藤芳隣

同五日

任東京府權少参事　川鰭從四位

故忠光雄孔度ス止義絶復叙贈
從四位祭祀料三百方拝領

十月八日
紫掛緒下賜

同九日
家孫拝領美
東京役所

同十三日
大納言
權大史
八四日
内者不美入勅書
上位ヲ

中山伯一位

勅任權弘　天野諸陵權允

齋藤参議

上杉從五位勝盛

中典医從六位　伊藤寛弁

正親町三條前内大臣

本官從六位
皇下　長谷部宣松縣知事

長　太市

上杉從五位

自ラ謹慎ニ付
進退伺不及其儀　三條西侍從

西条伊勢守殿仕作事

十七日

山形知事宣下

東京府権少参事

外務省出仕　高野長英

十九日

宣令使ヒ之ヲ分

廿二日

会計権少丞

頼之通知事ヲ免

廿四日

内番参入ス位分

鍋島従二位

坊城按察使大文

庁野十郎

大庭源次郎

識田従五位

澤　従四位

牧野従五位

牧野従四位　同

福島県権知事

宣下ヲ受ケ中ヲ以

権監事従七位

菱田按察使権判文

西村開拓権大主典

従三位辞退ス

聞食

本官宣下

嶋崎県大参事

長谷部三條大納言

同　従五位

諸藩聽其藩師発地出張許可ス門主関自今参役之幕

梶灯去用可ス事

庚午十月

太政官

京都下小学校

寺内千本東入小側

堀川元哲玄顕寺上ル二町西側

元哲玄顕寺上ル三町西側

今出川千本東入西側

西陣藤本上ル寺上西側

室町上ル寺上ル入西ル

木下実桜町東側

室町鞍馬口下ル二町西側

御前通下立売下ル西側

内野五番町小側

中立売裏門西南角

大宮今出川上ル西側

小川今出川上ル西側

今出川室町東角

出水日蓮北東角

京番組

二番組

三番組

四番組

五番組

六番組

七番組

八番組

九番組

十番組

十一番組

十二番組

十三番組

十四番組

下京一番組

二番組

三番組

四番組

五番組

六番組

七番組

八番組

九番組

十番組

十一番組

十二番組

十三番組

十四番組

新町蛸薬師上ル東側

錦小路油小路東入小側

同通室町東入小側

三條東洞院小西角

富小路六角下ル東側

河原町三條下ル西側

岩上佛光路下ル西側

油小路高辻上ル西側

新町四条下ル西側

佛光寺東洞院東入小側

数珠町佛光寺下ル東側

寺町綾小路下ル長寺内

醒井万寿寺下ル西側

松原室町西入西側

十五番組　長ヤ町中立売下ル西側
十六番組　中立売新町出西角
十七番組　猪熊下立売下ル西側
十八番組　小川出水下ル西側
十九番組　出水烏丸西入小側
廿番組　竹屋町小川東角
廿一番組　間之町竹屋町下ル西側
廿二番組　富小路夷川下ル西側
廿三番組　姉小路大宮西入小側
廿四番組　小川御池上ル西側
廿五番組　御池西洞院西北角
廿六番組　高倉御池上東側
廿七番組　富小路御池北西角
廿八番組　寺町今出川上ル西側
廿九番組　石薬師寺町東入南側

十五番組　高倉松原下ル西側
十六番組　錦ヤ町新町東入ノ
十七番組　間之町五條下ル西側
十八番組　七條新地菊ヤ町東側
十九番組　花ヤ町西洞院西南角
二十番組　高倉七條上ル坂町東側
二十一番組　下京棚油小路西入小側
二十二番組　大宮松原下ル三ノ目西側
二十三番組　同手二番組ト中合
二十四番組　大宮八條上ル東入行当り
二十五番組　古川前渡手東入東側
二十六番組　三条白川橋西入北側
二十七番組　建仁寺前下柳町東側
二十八番組　下河原ル長天町南側
二十九番組　建仁寺新地川服町
三十番組　大仏耳塚町

三十一番組　川端町九条大町下ル東側
三十二番組　二條寺町東入南側
三十三番組　清水地蔵太町上ル東側
三十四番組　二條川東新西洞院東側

三十五番組　馬町建仁寺町東入小側
三十六番組　伏見海道泉涌寺小側
三十七番組　西新屋敷美配石同ト三番ト中合
三十八番組　祇園町踊場

右之通ち屋ル　以上
閏十月廿日取調

廓下大年寄之名

千田　扶本　石塚　鶴飼　小條　三井　熊谷

機織番之女房
洗濯番針のばば
幸詰の女部
下役の女房
大南人の女房
おほこ　娘
武士の女房

廓に出てこもつとふ
ほどと
詰りこもつて
出ることを突出
今は打ちにかつて
談事の事

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5505535202

月囲の趣ニ付　其旨堂ニ勅ス

大蔵卿の仲居　誰でもほれたらしい者

おいこの飯焚　若衆でもいるまいもの

うむろ　ぶらりてよろう

遠藤
岩佐
長瀬
斉田

朝長

先般参藝圖ニ於テ仕居謹ス　伺ニ付ス　御沙汰　思召ニ以賞ス

復帰ス　伺ニ付ス

庚午閏十月

朝長

今般実家復帰ス　伺ニ付ス　格別之　思召ニ以先般為賞分ス

扶助俸ヲ下賜ス

庚午閏十月

伏見宮

朝長実家先般参藝圖ニ於テ仕居謹慎ス　伺ニ付ス　御沙汰　思召ニ以

復帰ス　伺ニ付ス

但先般為賞分ス扶助俸ヲ下賜ス

庚午閏十月

右之通ニ付為心得相達ス

庚午閏十月

留守官

凡例書

垂衣　ちゃくい　将衣　大紋　長袴　次袴　麻袴　指貫

烏帽子等老ヒ廃止　下云持合セハ分ハ宮時ニ付ヒ　不若

ヒ大礼ニ際　役負ハ新製　相用可ヒ

指貫之帯ニ指子ヲ用ヒ　官位ヒ色目違ヒ

如位之赤色ハ紫色ニ改リ

冠ハ礒ニヒ　無位之者迄ヒ冠ハ切ヒ

東京ニ於ハ矢鳥若用ヒ　四幕ハ迄矢鳥若用ヒ者　迄ヒ者

軍服ハ非常服ハ尚神ニ改リ

いの字　いろはしゑく

いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす

一寸先ハヤミの夜
論語ものの論語ものの
針の穴ヨリ天の星
二階ヨリ月薬
佛の顔も三度
下手の長たん銃
地獄の沙汰も金次第
猫に小判
来年の事を鬼の笑
いそにたなれる
武士喰わぬ高楊枝
ハみて出ること
寺下ヨリ佛
薩面追躍者也

王政古一新
秋月
雲井童雅
宣教使
神祇官の命
同　参文
岩倉の執事
耶蘇の教諭
十三年期限の金札
ものたい者も様
大久保一翁
大久保市蔵
岩下左二
芙蓉書

教法ものの

或人岩倉家之京来の一話ニ曰ク是迄皇道の意ニ陥レル王政復古の奥旨を能ク解シ郡縣之体ニ至ル者ハ甚タ少ク迚モ黄撥の見迚等之去中迄今更封建の世布令者ニも難ク成此姿ニハ人民の苦痛ニ且薩長藩等ヲ唱ク人数ヲ優レル帰ニ之頑ニ全ク改ル記シ事ニ不多ク誘ヲ建言も数多ク出ル中ニ上ニ通ル者ハ稀ニ時日後ニ京来ル者出ル者ニ天下の改革を掌ル事思ヒ事ヲ為ル者ハ此ハ辞職小岩倉ニ陥ル迚ハ最早一変ル遠ク失ヒ之法内之也此説亜実ニ詳

○

一廣嶋藩ハ閑浅野長之備後三原ニ三万七千余石ニ仕知之ル先年ニ大坂ニ法学ヲ習ヒ父子共ニ出ル老人ハ臺留ル老人ハ廣嶋藩邸ニ謹慎罪状ハ厚今製造一件ヲ事

[illegible]新以来新令朝暮に出ず実行の主れハ寡し賦税則ち[illegible]実行
[illegible]雪陰沐浴室の如き至り様にきも不[illegible]厚厳取上ゆ[illegible]怨
天王帝世の聖明在上の官員核群之賢良ナレハ下々の疾苦尾上も不[illegible]思
食其取れ事に於れ石至処なし然しにも不謂鷹鳥の眼にも又蔑ヒトカヤ如ク
未タ尽サレサルモノ五ケ條アリ其二曰盗人の税

窃盗ハ元ヨリ元手ヲ不費人ノ物ヲ只取ルニ此者無税ナルハ不公平
ニシテ如ク税則ヲ建テ以テ税ヲ免タカニ取ニハ如何トナレハ元手ヲ費シ
汗水カキテ銭ダニ造ザル貧乏人ノ税ヲ取リ己カ銭ニテ造リ名家
作ノ税ヲ取上ケ川火ノ災ニ逢テモ救モセズ取上ケ五ノ二窃盗ノ無税ハ
其ヲ失作ニハバヤ但窃盗ハ刑典ハアリトニカ然ラハ税ヲ取ル聚歛
家ノ刑典ハ如何先按ニ元ヲ有リ聚歛ノ民アラヨリハ窃盗民アリト

二曰猜帯ノ税ヲ可取

改府猜帯ノ不造ハ大改変ヲ行之此猜帯ハ貨幣ニ換レ證札ニ然ニ
引換不妄之則有名無実ノ貨幣ニ民欲有通商又猜帯ヲ
造ル之ヲ亦引換不ル而天下ニ廣ク行ノ記ル不以ニ其ノ乱ル

不言ヒテ其来ル責テ人ヲ教ス　上天之ヲ行カヒニ悲哀ノ人ニ在リテ
政ヲ行フ　皇徒ヲ汚スニ至ル事　如ニ天下廣ク行ノ深ク不問税ヲ
ヲ取ヲ怨ニ之ヲ造ラレモ改府之ヲ手入ラズニ天下ニ猜帯充満シ税ノ
輸入モ亦ヲカルベシ

三曰子産ノ税ヲ可取

西洋ニテハ帝王至ラサル巨商ノ富メルモ一妻ノミニシテ妾ヲ置ク者ヒ我
皇朝ハニカラス上　天子ヨリ下モ庶人ニ至ル迄妾或ハ囲イ者ト称シ人数
ノ妾規則妾ニ婦人ヲ愛シ怨ニ子ヲ産ニム方今士族卒族旧藩ヲ以テ集
庶民奇酷ニ窮シ飢餓スル形状如ケレハ其失改ト云ベシ然中ニ多ク特
官員又ハ公議公用ニ関係スル者本廣ニ妻子ヲ養キ怨ニ子ヲ産ニム一ハ
人情肖キニハ後ラニ人形ヲ独シ　皇国ノ倉廩ニヲ塡加スルニ宜ク速
カニ子産税則ヲ建テ男子壱人行花如ケ壱人行花ト取ルベシ妾服
ノ税ハ本腹ヨリ三倍スベシ且東勤ノ官員藩士ニ至ル迄必本妻ヲ
首連レ在京セシメ妾ト囲イモノヲ禁ス可キモノ

四ニ食物ノ税ヲ可取

古法ハ二食シ舜年数百年無矣安逸ヨリ習テ以テ三食ト成リ三食ナリシ當ナリ然ラ況ヤ官員ニ拳ル天下ノ改治ニ係シナカラ三食ノ外河長酔月中村有名其他ノ料食ヲ能食スル者アリ下々ニ減知減禄陸産ヲ失ヒ一日ニ一食ダモ不能ハザル者アリ皆何ゾヤ天下ノ人種シ帝王モ人種ニ人種ニ庶民モ人種シ只幸ト不幸トニシテ貴賤ノ區別アルノミ舜畎畝ノ中ニ拳ル帝位ヲ踏メハ而チ天子シナガシテ帝今ハ普國搖ナレハ而チ匹夫シ一時ノ富貴ハ浮雲ノ如シ庶幾クハ上天皇公卿ヨリ下富商民ニ至ル迄此理ヲ弁別シ公平ノ政令ヲ以テ治國安民ノ実行アランコヲ先美嘗リ飽食スル者ノ税則ヲ建ベシ

五ニ曰放屁スル者ノ税ヲ可取

日々ニ飽食シ徒ニ放屁ヲナス方今頻リニ開拓スレハ糞肥ロスラス然ル妄リニ糞ノ精気ヲ漏スモ甚タナリ宜シク之ヲ厳禁シ肥ノ足シニセンベシ若過テ放屁スル者ハ必税ヲ出サシムベシ拝屁ヲヒリテ屁ヲスボルノ古語ヲ按ズルニ屁イ隊イヲ編成シテ〳〵ラッパヲ吹キポンポント放発シ之カ為ニ金穀ヲ費シ肝心ノ時ハ屏ヤリニモ立ズ之ハ無益ト始テ心附キ之ヲ指テ屁ヲスボルトハ言カ如シ放屁ノ税ヲ取ノ策ヲ建テ宜シク皇國ヲ肥スベシ

右之陳々天下今日ノ羨勢也皇下ムシ腹ヲ拍ツ建言セラレシモ世上ニ於テ称讃ス皇下ニアラズンハ政府ヲ責ル者勿ンベシ宜シク五ヲ執養頼入リ也

慶応午月日

柔茶井入宰青鮫
大木古九減高
京桃嘉六市巣蚤

廣山正太郎後

東下

上部省

掌農勧石工及管鑛山製鐵燈明臺
鐵道傳信様等

右道理建言其大本

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5505535202

庚午閏十月　　太政官

○民部省中
寺院寮　地理司　驛逓司
土木司　戸籍司

右之通寮司更ニ相定ル事

庚午閏十月

○脱籍無産之輩僧籍ニ入ル者藩縣送之而貯方ニ入ル者泊ニ来
記合張ル者盗ニ類ス記合張ル者死ニ可取貯ニ入ル者ハ兼テ
布告之通可ル心得事

閏十月　　太政官

○諸商人本陣旅本陣之名目自今ニ廃焼失其外諸市ニ充
類一切ニ及ル止ル際ニ支ル生業可ル致ニ従而不延ル致
州郡ニ玄関上段之間等廃ル致ル家ハ銘々不ル為勝手事
但平常旅籠屋ニ而ハ新規ニ州郡玄関上段之間ハ不ル建ル致
名義ニ本陣旅本陣名義ニ無類焼及ル御平旅籠
屋通家作料ハ仮備ル　仰付ル事

閏十月　　民部省

○状見出張
大山京都府権大参事
帰省之ル願願掛ニ十一月二而伏見表発足之事

今般諸改革仕ル寺院ニ義ニ付ル降ル奉願ル
一寺院何宗ニ限ル住持僧職或ハ兼帯之事業ニ而ハ其他衆徒
表ル身ニ付ル勿論時宜次第其寺院廃絶之上ハ近檀家ト唱ル
ものハ神葬祭又ハ他之寺院ニ改宗ル仕ル而ハ庫裏
但一向宗ニ義ニ付ル子孫ニ付ル後俗家ト郡ル遠ル者ル義ニ付ル得ル其信
持堂衆ニ付ル前廃寺ル身ニ付ル勿論ル義ニ奉存

事分札 僧侶衆科之事ハ科ハ勿論之事ニ候得共衆僧時宜
ニ寺院廃毀ハ不苦成ハ 但書ニ下ニ隆義伺之通

一藩内ニ方之寺院之内本寺ト唱来ル寺ニ而ハ其藩ハ勝合ニ而廃
寺ニ分僧侶之分ハ生涯之通之分ニ而ハ不苦義ニ事庭ニ
但於其義ハ本山ハ其分ニ而ハ迫ニ而之義ニ事庭ニ

一諸末寺之義時宜ニ依本寺ニ合併仕不苦義ニ事庭ニ

一山伏ト唱袈裟法衣ヲ着シ社ヲ類ハ時宜ニ而廃止被遣修験
人ニ相應作役ニ不使不苦ニ
但於其義ハ本山ニ其義及對義ニ而ハ其義ニ事庭ニ

右之義ニ事庭ニ而ハ番奉願ヲ以上

庚午九月十九日

藩 作伯 藩
藩 廣内 藩
藩 吉人 藩
藩 出日 藩

辨官 事中

今般藩改改革仕ニ付ハ陳ニ奉伺
一年賀義端相変之節奏任以下士族ニ至迄如行衣中ニ可悲ニ
知事受至不及 奏聞義ニ事庭ニ
事分札 迄ニ一定ニ事規則ニ 作出ニ事
一会事ニ外勝手ニ事 朝廷ニ事向ニ事執不苦義ニ事庭ニ
事分札 迄ニ一定之事規則ニ 作出ニ事
一此節諸勢変革仕ニ付士族以下之者義一 朝廷之事振意ヲ不
発私怒ヲ奥ニ強情ヲ張リ意無ヲ結 事新政ニ妨害成ル者ハ之
節ハ其藩疾速相書懲悪之事仕ニ宜義ニ事庭ニ
事分札 伺之通
一祇禄唱者時事本開ル京去是迄之両衣ト去ル得 朝廷義諸

参与 藩
弁事 藩
副 藩

有事会議中為用不成義ト奉存候ハ如何ニ御座候哉
仍而札
兩表ト未ダ御決不成事会議中為用ハ不成ニ事
右之通ニ御座候間奉願上候
慶応元年九月
連名同上
辯官御中

年月十月写

沼田郡管下動揺之云々

江刺縣管下陸中國同伊郡遠野所村ヶ動揺ノ基ハ當年田方検見願出ニ付兼ニ御布告雖形之通リ内異議ニ付之耕地除畑ニ付ニ縣廳ヶ申達ノ通リ内異議ニ付之雖未届ト之旨ニ付之ハ從来之通調印ヶ之ニ付ニ而ハ先ニ畑色ニ付雖兼ヶ出願之通リ内異議ニ付及説諭ニ付諸中日延之義申出ニ付義知ル日限ニ付村ヶ役人共参ヶ遠役願書差出ル内異議ニ付雖兼ヶ願出ニ付ハ願出ニ付ハ

雖ヶ当年作方豊熟ニ付去年通之正税可納ニ付願出ニ付ハ石高等仕方荒ヶ分ハ丈ケ可納之ヶ方ヶ願出ニ付ハ検見之上引方上納ニ付願度ヶ申之ニ付ハ雖出義ニ付検見之上引方可申之ヶ方ヶ願出ニ付ハ重宮之儀ハ稲作苅之ニ付検見雖

右者ヶ郡下後村大組願伊ヶ新里村同之儀青笹村ヶ之儀検見願之義ニ付不振不審ヶ之ニ付姉ヶ沢中行ヶ之ニ付ハ検見願之義ニ付ハ十月十日ハ半時頃ニ而ヶ作人願ハ外ヶ群集ニ付及説諭一旦差留ヶ取ハ分時縣ヶ遠野所ヶ退去ニ付ニ而ハ願加所有田村百姓ニ付ニ外七人豪農商ヶ飲食等ニ付ニ酒肴ニ付ニ激暴ニ付ニ捕方手ニ付ニ人遣隅之一小縣常備之ヶ者ニ付ニ十人ニ付ニ人文書之官吏ニ而ハ右之内検見週村之者寄ヶ之人貧徴ヶ之ニ付ニ雖出ヶ之義ニ付ニ備之事勢盛岡縣ハ秋田ヶ之三小隊之者ニ付ニ相達出兵ニ付ニ

雖ヶ当年作方豊熟ニ付去年通之正税可納ニ付願出ニ付ハ石高等仕方荒ヶ分ハ丈ケ可納之ヶ方ヶ願出ニ付ハ検見之上引方上納ニ付願度ヶ申之ニ付ハ雖出義ニ付検見之上引方可申之ヶ方ヶ願出ニ付ハ重宮之儀ハ稲作苅之ニ付検見雖

右者ヶ郡下後村大組願伊ヶ新里村同之儀青笹村ヶ之儀検見願之義ニ付不振不審ヶ之ニ付姉ヶ沢中行ヶ之ニ付ハ検見願之義ニ付ハ十月十日ハ半時頃ニ而ヶ作人願ハ外ヶ群集ニ付及説諭一旦差留ヶ取ハ分時縣ヶ遠野所ヶ退去ニ付ニ而ハ願加所有田村百姓ニ付ニ外七人豪農商ヶ飲食等ニ付ニ酒肴ニ付ニ激暴ニ付ニ捕方手ニ付ニ人遣隅之一小縣常備之ヶ者ニ付ニ十人ニ付ニ人文書之官吏ニ而ハ右之内検見週村之者寄ヶ之人貧徴ヶ之ニ付ニ雖出ヶ之義ニ付ニ備之事勢盛岡縣ハ秋田ヶ之三小隊之者ニ付ニ相達出兵ニ付ニ

十三日朝 盛岡藩ヶ押番ニ付ニ村上大条事出張ニ付ニ農民之儀ニ付ニ

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5505535202

[illegible]男女引率小刀ヲ帯ル者四五輩ニ外ナラズ先生ノ者大参事出張ヲ
見文移合ノ浮説ニ在リ分別ヲ以テ敬礼恩義ニ背ク事ニ至ル事
主策ニ者ニ[illegible]ル者ニ[illegible]ル[illegible]ル[illegible]ル

外ハ同十四日人板垣退助ト巴人列爾外ニ廣潟藩於泉文
含議ヲ立度ヲ通信ヲ含ス張三人信ヲ含ス為接移僧
書類写ノ取落ニ来達ハ各外ニ陳義別同ニ和ヲ振
其一 幸ニ接意ハ不除理ニ解ヲ度ヲ者時ハ幸ノ
身分ニ対方ニ沙先着ヲ度トノ事
其二 士幸農工商ノ平民活業ノ称呼ニ対族称ハ各之同一ノ
平民族ナリ故ニ恒ニ身分ノ姿一致ニ者ニ不除理対熱分
ヲ磨スル又絶ル幸ヒ敬ニ事
此二ヶ條モ石ニ即沙法ヲ者ニ
右ニ件ニ品中ハ先一列ニ二十歳不下堪歎ニ
○

岡田藩伺

平民苗字刺羽織禁令一本力等相用ル義ハ各藩ヲ者
石其外
逆ヲ決 作出者ニ事

抑東外務省大臣清國ヲ之書簡

外務省出中

清國出張官員

伏冷之際卿輔事始益事健剛各位事勝識天ノ一方ヲ指ニ査
賀奉趣望ニ陳者同行前光以下安穏着ニ事ニ安放生頭ニ
陳者先使汽一篇情状ヲ後去七日言絶理各國事務兼署
言通商大臣成林侵部ニ多談判仕ル人ハ今般天津ニ
沙到着ニ義当海道長途宗瀛ヨリ来ル対平壌京徒
理衛門大臣ニ面ル是迄事ハ各国ニ降約ニ者先
天津ニ約定法ニ事成例ニ対ル他ノ条人ニ者現在絶理各
国事務大臣ニ恭親王名代トシテ出張仕ル陳述事件義ヲ可
申者ニ付ニ事ハ対ル他ノ条ニ者ハ不日ニ張ル清ル行ル幸
省卿大輔ニ者ハ為ル絶理各国事務大臣ノ著ノ長官ナル
恭親王ハ是モ直ニ差出ル成林ハ大臣ハ清ハ北京ニ
王大臣恭親王ハ出国ニ者ハ其日ハ加藤其後十四ニ至リ
成林ハ恭親王ハ大臣ニ連名ニ者ハ王者法ル大日本國之

義を相期し大海を隔て礼義を邦柄通信し義深く冀望する事
勿論成林に於て條約の内議は高麗と支殊更時務に九秋に
成候ては支内天津河氷凍候り共不拘合に対支迫に條約請判
を遂ず大日本官員之来意を遂し速に成功帰朝を待養し為
去運活を和誼を敦くスルを大名振を不支保ナカラ北京に入り義を
敬を奉親を自重且待候を欲ス無之は貴国是迫奉而条
條約を終結天津に於て未帰後入京を事未執ち元より大日本
国は講文旧誼を外国の比に無之貴国是迫を四海に波り日本
事親昵候を称を義を名代外国を議論を不受除此度使重
臣に下使を理を称を返答を数に即チ別紙を度小京総
理衙門より来函を録し右見セ即別紙写を上に右之義は是迫
之日軍を次第に行ず條約内談を大事と候を旗昌洋行真之三
品銜劉森滋号柳に会般條約内議掛り通高麗成林より相命し
別に日々接近都合を以十二日に至り右劉森に郷大輔より総理
衙門之を書簡を抱し成林と先出し同人を北京条事督大臣

義立相期し外慢に成候仕尚又来十二日 皇国諸出陳約事
移り来之上 劉森に抱し成林に義出事は尚成林熟度之後較
論仕長後茶親を始ス倒定ス後前光等と右通高大臣成林
と調下此後欽差大使義来之日本條約に取掛り此任と候
尚り国在留支那人五五日り国人支那に居り者不五名も談に而
事遂算ナリ相整り上後十月初旬より天津河氷凍候事故
必之右期とも成功引揚帰朝之仁洋に居る意外都合
相運と真 皇国之大事義を以痛之仲共事氷解を成
清国方名之事相武英殿大学士両江総督曾国藩 太子大保恨
兼大学士直隷総督李鴻章 其代通商大臣知府知縣等に面
会談話候外仕 皇国之礼儀之邦と空内会四之親と陳
和漢通文スルハ最欲スル外ト保ス一同表脱侍居
頃日兼り及ハ仏学文戦仏大敗且内乱ヲ生し共和政治ノ体
ヲ定立し何其大行領ト相成り百年見解ニテ仏帝ノ多ノ兵ヲ
卒ヒ学に降参に及ヒ即チ仏ニヲ日耳曼中に出因仏布太子来

英佛ニ逃避方今孛国ヲ攻撃シ居佛大行領事書ヲ
「ビスマルク」ニ送リ其事ヲ和ノ議スルヲ請フト云フ

一 暹羅ヲ鎮戍シ居ル意太利亞ノ教師人佛帝ノ敗ヲ突拳
地ヲ侵略シ法王ヲ擁シ新也

一 六月中禁拂ヲ為他天主堂一件頃日大学士李鴻章外国人ニ
該判右暴拳ニ及ヒ巨魁十五人斬首餘関係二十人ハ僻地流
謫之上天主堂ハ外国人亭宅賠償ニ分ハ教ヲ陪進シ且償金若干
義出ス暴定ル報義及ル

右斬首ハ今三四日中ニ為地ニテ外刑取行ハルヲ也

先ハ要利隆鄰船侵ヲ入ル又云ハ下ニ自殺是祈不悉

九月十七日書置　天津三嶋河上旗昌洋行ニテ

鄭永寧
花房義質
柳原前光

外務省大小丞書中

副役名倉尾昌等ヲモ可著ル出ル者中ノ事ヲ宣ヲ以テ声ヲ
一 其後ニ報ニ柳原前月廿五日ニ帰朝ニ成ル尚ル未ダ詳ラカ若ク
ルノ事中也

清國ヨリ送ル書翰

大日本國從三位外務卿清原宣嘉從四位外務大輔藤原
宗則致書于
大清國総理外國事務大憲臺下茲者我　國往昔以降與
貴國往来交誼特深方今因與西洋諸國定約貿易論者或
謂我　國未嘗與　貴國結盟竊思両國有誼有余而未免
名分不足之嫌疑早年使更倏盟約祇以國家多故未暇其
顧然此事終不可久曠也今本省業經奏准權派從四位外
務權大丞藤原前光　正七位外務權少丞藤原義質從七位

文書權正鄭永寧等命往　貴國須令商議通商事宜以便
後有我　國欽差大員一入　貴國定其通信正約或駐劄
京師或往來各港等因談官員等抵至　貴憲臺下則祈隨
接待聽其陳述本國所望事件並求　貴憲著實周旋從善
裏成為此本省特附此書致上謹言
明治三年歲次庚午七月　日　義

大日本從五位外務大丞九山作樂謹致書
大清國江南道大司憲宗瀛涂公　閣下嚮者我政府命遣
外務權大丞柳原前光等入　貴邦修好通爰登煩良境必
可期然而　貴治上海縣與我通航最為近便因而我商旅
出由貴途居焉亦必漸多矣人多事滋勢所不免且今修好
也初尤宜早為檢束務使兩安不亦可乎其如柳原前光等
公事即有停安亦應尚須時日故茲權特現在　貴治之我
品川忠道者委令署理檢束事宜外派出齋藤盛正者以為之
劑蓋此二員克勤從事可稱其職者願　閣下此善視俾獲
便宜相商緩急相濟為幸又悉柳原前光等首經　貴方極
美優賜一切彼此為公永銘　高誼并此鳴謝謹告
明治三年庚午十月　日

私義意奉頒之通為洋學所業十ヶ年之內福澤諭吉ハ入塾住
ヶ所ハ此度奉頒ノ旨

收　野送五位

辨官局中

局中孔　頒之通ル　副食局ヘ

今般為洋學所業福沢諭吉方ハ十ヶ年ヨリ入塾住ヶ所依然滑稽
可難ヶ所ハ尤来自ノ不陽驚ノ業ヒ紙ノ磨ヒ士風ヒ苦ヒ業
泥勉住ヶ所ヒ五ヶ年間ヒ位階ヒ勿ヒ蝶躁ヒ恐ヒ不社秋業
事ヒ位記謹奉還住ヶ所ヒ化年稍成業ヒ上仕ヶ之ヒ自ヒ
仰付ヶ所更ニ賜ヒ難ヶ所ヒ此度ヒ通ヒ親　奏可ヒ

右任願祈之趣聞届候事

庚午閏十月十三日

辯官局中

牧野淡路守

牧野淡路守

勅学中位記送上頒之通次　大食令

庚午閏十月

太政官

常陸藩ヨリ私地引渡願出ル件高田藩ヨリ振替願出ル件沙汰難及ス旨附札ニ成

右ハ高田藩ヨリ藩之元益人何某ヨリ藩ヨリ民政方ヘ代セシ林行某方ヘ被成向渡ヲ以テ細物ヲ以テ出金致シ為藩私地引渡ヲ願ヒ沙汰難及ス旨附札成ル私地ヲ改ル故難ヲ起シ郷藩事ヲ仰付ケラレ度旨願ヒ上ル筋相地ニ而ハ上ヲ不許合ヒ事ニ付旦常陸藩ヨリ三ヶ所新ヲ願ヒ中ル処当藩ヨリ許容ヲ願ヒ如何之事ニ付ケ中ル林氏ヲ以テ三ヶ所ハ藩ヨリ已ニ無之ヲ相地隔絶シテ改令難ヲ為ス藩ヨリ藩縣ヲ相治メ其球ヲ今是等ヲ事ヲ以テ無益ヲ事也且事ヲ以テ八藩ヨリ廃物ヲ成一只ヲ行ヲ願ヒ事ニ付ケ中ル成ル藩ヨリ無益ヲ事ニ

右ハ高田藩ヨリ願ヒ中ル事ニ付高田藩一書ヲ以テ帰ス

十月上旬神船之写

一用之儀ヲ以テ陸奥来ル三月迄差ヲ以テ出ル身勝仕候ヲ以テ

五人ヲ以テ名目報見ヲ以テ取調来月十日迄ニ差出ス事

但人体書之ヲ以テ其所ヲ申ス事

右之通出張国中之社寺ヨリ書付ヲ以テ達ス

庚午十一月

京都府

伏見宮ヨリ公視

改名熊久頒之通ス

庚午十一月

太政官

伏見宮ヨリ熊久

依

忠食自今宮ヨリ可称ス

庚午十一月

太政官

右之通ニ付 仰出廉山陸國中 社寺ニ無之達ニ及ぶ

庚午十一月　　京都府

神南藩中貨幣偽造者不少今般神仏分離ニ付仏像藏品等
送之後多人数取集之ニ及ひ神社及仏ヲ毀棄ス仏ト法還再ハ偽
造ニ企ル者ハ中國之大禁ニ犯ル不審ニ付詳細ハ 仰渡廉
数ニ都下ト潛入偽造不仕様ニ致ス者有之ハ其筋ニ申出
或者道ニ出逢ハ若陸ニ出ル者ハ切ニ切ニ厳重ニ及取扱
旨山陸國中社寺ニ無之達ニ及ぶ

庚午十一月　　京都府

金札新發行後ハ市在流通盛大ニ成ル業廣ク多分流通
之様ニ相ル外ニ付右之通ニ及ぶ市在之次第ニ付ハ
無之向
無度ニ見分難ニ成ル切之雜説之様ニ相ル為ニ
為替所ニ他ニ外為替金積内ニ改不在建ハ別紙定日定刻
書之通ニ刻ニ付ク
社寺ニ於ニ改ニ付ク事ニ
右之通山陸中

庚午十一月　　京都府

金札英廣改日刻
毎月三七日　但五ツ時ト七ツ時迄
右之通ニ付

庚午十一月

開十月及布告之通諸學洋算習學之道ニ開ク則學舎西
リヤンドルフレー三度人御英蘭獨逸之新學ニ教學者令教授
度仏蘭之者ハ書面ニ認ル書度ク願ク
但頭書ニ英語或ハ独逸語又ハ数學等右之學科書記
可差ク事

右之通山陸國中社寺ニ無之達ニ及ぶ

京都府

庚午十一月

京都府下中學校ニ開ク学舎ニ婦女姉士度人ニ至迄入学ニ及ぶ事

庚午十一月　　大政官

右之通ニ付 仰渡ニ相達ニ事 但開業日ハ追ク可達ニ事

庶第十号

右之通出仰出候間此旨山城国中に社寺に告達致すべし

庶第十一月

留守官

京都府

今般当府下に中学校設建に就き学齢子弟凡七歳にして中学に入り普通学を修め十歳にして小学に進み十歳にして中学に入り出之学を修め二十歳にして中学終り乃ち其俊秀なる者は大学に更に専門科規則に就き進学の者也中小学校の市民子弟に習学似て為に兼族以下卒に至る点は小学校に入る者無也故に右の規則面々雖計り難中学校内に一学舎を設け兼族以下卒等は舎中に於て小学に準ず小学に準ずるの科に入る者

一 士族以上にして既に入学の者は前段小学舎に入る者及先中学等外生として別に一席を設け試業の上進学の科に入る者

一 学術は医学に準ず其学業に士族或は年長の者にて既に修業の経験ある者は自己に習熟の学術に準ず者は進学に入る者歳数に拘中学校に於て学術に準ず者は入学又は日面中に出席可先詳り申

京都府

但講釈教諭等種々の義者市内中に玄関に於て善到帳に記す科目に準ず通達の者に記す事

右之通山城国中社寺に無漏告達の者也

庶第十一月

京都府

中学 五科規則

子弟凡そ八歳にして小学に入普通学を修め大学専門五科の大意を知る

句読 習字 算術 誌学 地理学 五科大意

子弟凡そ十歳にして小学の事終り中学に入る

中学

子弟凡そ十五歳にして小学の事終り十五歳にして中学に入る専門の学を修む科目左の通

教科 神教学 修身学

法科
國法　民法　商法　別法　訴訟方　萬國公法
利用厚生学　典礼学　牧政学

理科
格致学　星学　地質学　動物学　植物学　化学
重学　数学　器械学　度量学　薬造学

醫科

豫科
数学　度量　格致学　化学　金石　動植学

本科
解剖学　原病学　毒物学　病理　訓験学　醫新説
内科外科及雑科　治療学　産生学

文科
紀傳学　文章学　性理学

其俊秀ノ士ヲ中学ノ人事説ノ乃チ其俊秀ノ選ヒ之ヲ

大学ニ貢ス

右之通被相定ル事

此度厚生学ニ用ル器械ハ計入之板ニ書ス事ハ其外掛合ニ者ハ補五調し別紙ニ通中ニ中ニ路四ヶ所ニ雇ヒ以ル為ニ達ル様ニ可ル計ル別紙ニ写ス公浮書達ス清ニ上西京ニ寄ル様ニ也

十一月　十七日

豊津藩立校大参事

大教部輔事

表ニ書ス日録ハ馬測格天屬之法別紙ニ通縣内ニ周十四胃乳入之企謀ス故ニ者ハ其ハ留米益ニ者ハ補五調ル凡右企謀之者ハ配ル之書附帳中ニ記スハ他ニ在ル極庭ニ及報知ル義ニ者ハ之ハ屬内寺院ニ少ニ者ハ寄ル出国者期限ニ義ニ者ハ不在報國院ニ者ハ公隊ニ配屬内ニ演出ス様ニ在ル也　郡内格案ニ在ル金ハ者ハ仕事ニ要ル者

[illegible]程ニ及ヒ終ニ死ス伊勢国法隆寺中臣香春清水寺者
昔三ヶ年遊学ス於登京洛上国ニ門名ヲ去名染[illegible]
今帰ル[illegible]書生ヲ書ル[illegible]家ニ住居ス数ヶ月ニ来テ探
索ス者ヲ[illegible]ス帰ル[illegible]伊方村法蓮寺法用ニ住ス
二三日不見帰ル[illegible]全ク行ル[illegible]及[illegible]ニ[illegible]
寺ハ来テ捕及拷問ス[illegible]進ク[illegible]
[illegible]人ニ[illegible]者ヲ中ニ[illegible]不潤中ニ[illegible]
寺中ニ進ク石窟ニ者ヲ来上ラ削村元ヲ[illegible]松井小一市[illegible]
去事ヲ元藩士家来井上勘次市ト者外百姓内者ヲ捕
捕ル者ヲ[illegible]ル右ハ[illegible]百姓ヲ人ヲ捕ル

経済学部研究室印

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5505535202

東京大学経済学部図書館
5505535202

東京大学経済学図書館所蔵 旧図書館分類文書 5505535202